

## 第 II 部 2008-2009 年度における各研究室等の活動



## 01 言語学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2009年度末現在の教員数は、教授3名、准教授1名、助教1名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室の教員をはじめ、本学の留学生センター、および情報理工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では10名前後で、大学院修士課程へは、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。課程博士が数年前に生まれて以来、博士課程大学院生の間では博士論文を書く態勢が定着してきている。

#### (3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979年以降『言語学論集』を毎年刊行している。最も関係の深い学会は日本言語学会であり、教員が委員を務めるほか、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会で発表することもある。両学会とも本研究室の教員が役員を務めている。

また、1998年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が毎期1人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批判を受けるというものである。

当研究室では、1998年以來、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。そのURLは次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/indexj.html> ここでは、『東京大学言語学論集』の目次と要旨も見ることができる。

#### (4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、アメリカ、韓国、中国、マレーシアなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員の氏名・専門分野・在職期間

- 上野 善道（教授）：日本語アクセント論 1981年4月～2010年3月  
熊本 裕（教授）：イラン語学 1989年4月～現在  
林 徹（教授）：チュルク語学 1997年4月～現在  
西村 義樹（助教授→准教授）：認知言語学 2004年4月～現在  
梅谷 博之（助教）：モンゴル語 2008年4月～現在

## (2) 助教の活動

梅谷 博之 (うめたに ひろゆき)

在職期間：2008年4月～現在

研究領域：記述言語学, モンゴル語 (ハルハ方言)

論文：(2009.3)「モンゴル語における対応する能動文を有する受動文」久保智之・林徹・藤代節 (編)『チュルク諸語における固有と外来に関する総合的調査研究』：40-66. 福岡：九州大学大学院・人文科学研究院.

研究発表：(2008.11)「モンゴル語の受身接辞 -GD を伴う動詞の意味」日本言語学会第 137 回大会, 金沢大学, 2008年11月29日.

(2008.11)「モンゴル語における「所有者受動」をめぐって」日本言語学会第 137 回大会ワークショップ「《所有者受動》再考」における発表, 金沢大学, 2008年11月29日.

(2010.2)「モンゴル語の「名詞+形容詞-tai」という表現について」四科研合同研究会：アジア言語の研究—最新の報告—, 京都大学ユーラシア文化研究センター, 2010年2月13日.

フィールドワーク：

2008年8月：モンゴル国ウランバートルで言語調査

2009年8月：モンゴル国ウランバートルで言語調査

## (3) 外国人教師の活動

なし

## (4) 内地研究員・外国人研究員

	2008年度	2009年度
内地研究員	1名	1名
外国人研究員	1名	2名

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「日本語の命令表現における「動詞+ている」の意味」

「コンピューターによるアクセント規則の検証」

「報道におけるアラビア語の外来語についての一考察」

「古典ナワトル語における *particle in* の分布と機能」

「日本語の国語教育における可能表現と中学生による運用の実態調査」

「「けど」の文末用法をめぐって」

「ロマンス語音韻史再考」

2009年度

「隠喩と提喩の関係について——カテゴリー化としての隠喩・提喩考察——」

「バスク語ラプルディ方言訳聖書における重複合形の用法と意味」

「Possessive Prdicate Constructions in Indonesian」

「苗字の分類」

「湖南省江華瑶族自治县の梧州話の成立過程及び帰属問題についての試論」

「*On the Definite Article in the Destruction of a City Constructions*」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2009年度

伊藤慶「現代ヘブライ語における移動事象の言語化の多層性」

(指導教員) 熊本裕

岩崎加奈絵「ハワイ語神話テキスト資料における 'ana の分布および機能」

(指導教員) 熊本裕

王海波「三家子満洲語の基礎的記述」

〈指導教員〉林徹

神庭 真理子 「日本手話の移動表現」

〈指導教員〉林徹

Boo Huey Joo (巫蕙如) 「A Quantitative Comparison of Mandarin Chinese Proficiency between Chinese Malaysians in Malaysia and in Japan」

〈指導教員〉林徹

高山林太郎「八丈方言の母音の通時的変化」

〈指導教員〉上野善道

平田秀「三重県鈴鹿市方言のアクセントについて」

〈指導教員〉上野善道

森田鉄也「前後の時空間メタファーの成立要因」

〈指導教員〉西村義樹

山下里香「Codeswitching and language use as discourse strategies: A case study of Japanese-Urdu bilingual pupils in the G mosque community and its English class in Tokyo suburbs」

〈指導教員〉林徹

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

李文淑「全羅道方言から見た韓国語のアクセント変化について」

〈主査〉福井玲 〈副査〉上野善道・熊本裕・林徹・生越直樹

梅谷博之「モンゴル語の使役接辞・UUL と受身接辞・GD の意味と構文」

〈主査〉林徹 〈副査〉熊本裕・西村義樹・庄垣内正弘・鷺尾龍一

河須崎英之「中国で話されている朝鮮語のアクセント」

〈主査〉福井玲 〈副査〉上野善道・林徹・生越直樹・伊藤英人

姜英淑「韓国語慶尚南道諸方言のアクセント研究」

〈主査〉福井玲 〈副査〉上野善道・熊本裕・林徹・生越直樹

若狭基道「A descriptive study of the modern Wolaytta language (現代ウォライタ語の記述的研究)」

〈主査〉林徹 〈副査〉上野善道・熊本裕・西村義樹・柘植洋一

2009 年度

(甲)

坂本文子「Clause linkage in modern Khmer (現代クメール語における節接続)」

〈主査〉角田太作 〈副査〉林徹・大堀壽夫・堀江薫・峰岸真琴

三村竜之「Issues in Danish Word-prosody: A Synchronic Description (デンマーク語語韻律論の諸問題: 共時的記述)」

〈主査〉上野善道 〈副査〉熊本裕・林徹・福井玲・田中伸一

(乙)

月田尚美「セデック語(台湾)の文法」

〈主査〉角田太作 〈副査〉西村義樹・土田滋・平野尊識・北野浩章

## 02 考古学

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

東大考古学研究室は、伝統的に東アジアの中の日本という視点を重視してきた。同時に、研究科内の常呂実習施設や韓国朝鮮文化研究室、あるいは学内の総合研究博物館、新領域創成科学研究科、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、朝鮮半島、北アジア、西アジア等の考古学分野ないし生態系史や年代測定学等の関連分野の教員と協力して、幅広く教育研究活動を展開している。

#### (2) 専攻としての活動

50年以上にも及ぶ北海道における調査では、常呂実習施設との共同調査として北見市常呂町トコロチャシ跡遺跡の調査を終了(08年)、新たに大島2遺跡の調査に着手(09年)した。

大貫を代表として07年度より開始した科研費課題である東京大学とロシア・ハバロフスク郷土博物館との国際共同調査では、引き続きアムール川河口部のマラヤ・ガバニ遺跡の調査を行い(08年)、09年度はハバロフスク近郊のクニャーゼ・ボルコンスコエ1遺跡を調査した。

佐藤を代表とする科研費課題は08年度が最終年度であり、07年度に引き続いて北見市吉井沢遺跡の調査を実施し、研究室所蔵の北見市紅葉山遺跡の再整理報告等と合わせて、研究成果報告書を刊行した。09年度からは新たに黒曜石の流通と消費を課題とした新規の科研費課題によって、吉井沢遺跡の調査を継続した。また、佐藤を計画研究の代表とする特定領域研究は、09年度が最終年度であり、西アジアを中心とした旧石器時代における社会複雑化の課題に関する取りまとめをおこなった。

#### (3) 研究室としての活動

『東京大学考古学研究室紀要』は、08年度23号、09年度24号と順調に刊行された。

08年2月日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡から何がわかるか?-Geoarchaeology-」、同4月公開シンポジウム「<伝播>を巡る構造変動-国府石器群と細石刃石器群-」、同11月国際シンポジウム「環日本海北部地域の後期更新世における人類生態系の構造変動」、09年11月公開シンポジウム「黒曜石が開く人類社会の交流」

#### (4) 国際交流

ロシア・ハバロフスク郷土博物館、同国立極東大学博物館、同サハリン総合大学博物館との間に結んでいる研究交流協定に基づき、科研費課題を遂行し国際シンポジウムを開催した。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

今村啓爾 日本先史考古学・東南アジア考古学 (09年度末退職)

大貫静夫 東北アジア考古学 (現在に至る)

佐藤宏之 旧石器考古学・民族考古学 (現在に至る)

#### (2) 2008～2009年度に受け入れた外国人研究員等

2008年度

外国人研究員 張 龍俊

2009年度

外国人研究員 張 龍俊

PD 近藤康久

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「加賀藩上屋敷の食生活と廃棄の実態」

「馬淵川流域における縄文土偶の研究」  
「装飾器台と鼓形器台からみる地域間交流——近畿北部を中心に——」  
「古代における鉄製鋤先の研究」  
「馬具からみる後期古墳の階層性——南関東を中心に——」

#### 2009年度

「埼玉県における土錘・石錘の研究」  
「千葉県東京湾沿岸地域における縄文時代の錘の分布」  
「イラン、マルヴ・ダシュト平原、ムシュキ、ジャリBの「有溝石」について」  
「房総半島の中世——千葉氏と県内の城跡——」  
「弥生時代後期から古墳時代前期の南関東における低地の方形周溝墓と周溝を持つ建物跡の検討」  
「埼玉古墳群の諸問題」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

#### 2008年度

鈴木舞「殷代後期の青銅器生産」  
〈指導教員〉大貫静夫

#### 2009年度

石丸あゆみ「朝鮮半島南部出土弥生系土器から復元する日韓交渉」  
〈指導教員〉大貫静夫  
古西里美「真脇遺跡を中心とした能登半島北部における縄文時代の剝片石器の研究」  
〈指導教員〉佐藤宏之  
林和広「南西九州における後期旧石器時代後半期石器群の技術構造とその変遷」  
〈指導教員〉佐藤宏之

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

#### 2008年度

(甲)  
笹田朋孝「北海道における鉄文化の考古学的研究——鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心として——」  
〈主査〉熊木俊朗 〈副査〉今村啓爾・大貫静夫・佐藤宏之・村上恭通  
(乙)  
堀内秀樹「近世陶磁器の消費に関する考古学的研究」  
〈主査〉今村啓爾 〈副査〉大貫静夫・吉田伸之・谷川章雄・荒川正明

#### 2009年度

(甲)  
石井龍太「琉球近世物質文化の多角的研究」  
〈主査〉今村啓爾 〈副査〉大貫静夫・佐藤宏之・村井章介・上原静  
山崎真治「西日本縄文文化の基礎的研究」  
〈主査〉今村啓爾 〈副査〉大貫静夫・佐藤宏之・西秋良宏・矢野健一  
近藤康久「地理情報システムを用いた考古学的時空間分析の方法と実践——西南関東における縄文時  
代錘具分布を題材に——」  
〈主査〉今村啓爾 〈副査〉大貫静夫・佐藤宏之・西秋良宏・宇野隆夫  
(乙)  
今村啓爾「土器から見る縄文人の生態」  
〈主査〉佐藤宏之 〈副査〉大貫静夫・熊木俊朗・辻誠一郎・谷口康浩

## 03 美術史学

### 1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

現在の教員は、教授2名、准教授1名である（2008年3月までは助教1名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言い難い。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員4名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センター先端構想部門（2005年3月まで文化交流研究施設基礎理論部門）の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠一杯である。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、2008年6月より教授1名が再び美術史学会の代表委員となり、学会活動を主導した。なお、別の教授1名および准教授1名が、前年度に引き続き美術史学会の常任委員を務めた。2008年5月から6月にかけては、多くの大学院生と学部学生の協力のもとで、第61回美術史学会全国大会を当番機関として実施した。2010年3月には美術史学会東支部例会を担当した。このほか1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に26号（2010年）に至っている。教育活動として毎年実施される古美術研修旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流も盛んである。2010年11月現在で、外国人留学生の博士課程在籍者2名、修士課程在籍者1名、外国人大学院研究生1名がいる。2008年度には、ブラウン大学のジュリア・フリードマン教授が外国人研究員として在籍した。同じく2008年には、5月に東京大学COE「死生学の展開と組織化」との共催による公開国際シンポジウム「礼拝像と奇跡 東西比較の試み」を開催、ハーヴァード大学美術館のアイヴァン・ギャスケル氏と在フィレンツェ、ドイツ美術史研究所所長ゲアハルト・ヴォルフ教授を招いた。また7月にフィレンツェ歴史美術・民族人類学文化財およびフィレンツェ市国立美術館連合特別監督局長、クリスティーナ・アチディーニ氏を招いてイタリア美術特別講演会「フィレンツェ美術の至宝の誕生地一」を開いた。9月には、イタリア文化会館と損保ジャパン東郷青児美術館主催の「ジョットとその遺産展」開催記念日講演会に協力し、フィレンツェ貴石製造所および附属修復作業所監督長、ブルーノ・サンティ氏とともに教授1名が参加した。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

小佐野重利教授（西洋美術史）  
佐藤康宏教授（日本美術史）  
秋山聰准教授（西洋美術史）

#### (2) 助教の活動

当該期間は助教不在のため特記事項なし。

#### (3) 外国人研究員・内地研究員



### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

- 「乾隆ガラスに描かれた文様」
- 「バイユータペストリーをめぐる諸問題——図像と歴史的機能について」
- 「クロード・モネ《睡蓮》連作について」
- 「菱田春草「落葉」（永青文庫蔵）研究」
- 「鈴木其一筆「夏秋溪流図屏風」について」
- 「ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの《平和》《戦争》《労働》《休息》をめぐる」
- 「陽明文庫本「春日鹿曼荼羅」について」
- 「フェルメール作品研究」
- 「興福寺北円堂無著・世親像について」
- 「喜多川歌麿『歌撰恋之部 物思恋』について」
- 「パウル・クレー 児童画への関心」
- 「ウィリアム・モリスの書物芸術：エディトリアルデザインが語るもの」

2009年度

- 「カスパー・ダーフィット・フリードリヒの風景画について」
- 「15世紀ネーデルラント絵画研究——ヤン・ファン・エイク「ワシントン受胎告知」について——」
- 「ムーヴメントとしてのアウトサイダー・アート——1990年前後の「立役者」とその背景」
- 「ジョン・コンスタブル《牧草地から見たソールズベリー大聖堂》——作風の変化と虹のモチーフについて——」
- 「小林清親写生帖と「東京名所図」」
- 「ニーシャープルの多彩釉刻線文陶器の分類」
- 「J.-A.-D.アングルの求めた美と彼の作品の歴史的意義をめぐる——《グランド・オダリスク》を中心に」
- 「フラ・フィリッポ・リッピ《聖母子》の変化と継承——ボッティチェッリの模写を通して——」
- 「ゲルハルト・リヒター『1977年10月18日』について」
- 「小林清親の日清戦争錦絵」
- 「土佐光起筆「源氏物語図屏風」についての諸考案」
- 「佐伯祐三《扉》に見られる立体感」
- 「葛飾北斎筆「潮干狩図」の考案」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

- 副田一穂「ジョアン・ミロの作品における「絵画の殺害」  
〈指導教員〉小佐野重利
- 吉田暁子「岸田劉生の静物画（一九一六年から一九二〇年まで）」  
〈指導教員〉小川裕充
- 柏智久「アンソニー・ヴァン・ダイク《イタリア素描帖》について——ティツィアーノ作品との関係  
を中心に——」  
〈指導教員〉小佐野重利
- 佐藤菜々子「ジェームズ・マクニール・ホイッスラーのアトリエ画制作の試みについて」  
〈指導教員〉秋山聰

2009年度

- 山際真穂「北斎の洋風風景版画について」  
〈指導教員〉佐藤康宏
- 安在媛「騎驢図研究——瀟橋尋梅図を中心に」  
〈指導教員〉小川裕充

岸田陽子「クリストファー・ドレッサーの銀メッキ製品デザイン」

〈指導教員〉秋山聰

小檜山祐幹「パラッツォ・マニャーニにおけるカラッチ工房によるフレスコ画制作」

〈指導教員〉小佐野重利

永井裕子「1500年前後のヴェネツィアにおける地誌的表現——東方風の物語画を中心として——」

〈指導教員〉小佐野重利

松井裕美「1947-1948年のピカソの陶器制作——アンティープ美術館のコレクションを中心として——」

〈指導教員〉秋山聰

森道彦「初期狩野派絵巻の制作」

〈指導教員〉佐藤康宏

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(乙)

日高薫「異国の表象 近世輸出漆器の創造力」

〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉小佐野重利・松井洋子・鈴木規夫・岡泰正

## 04 哲学

### 1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木巖翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年からは、思想文化学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基経文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的な研究および個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

現在の所属教員は、教授4名、准教授1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理哲学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い簡域をカバーするべく、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフが構成されている。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。加えて、2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講されている。さらに、毎年、他大学から3-4名名の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から毎年進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年 20 名を越えている。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心がもたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあつて重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている「哲学雑誌」の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披渡と研鑽の場として機能している。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学グローバル COE との連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書もすでに刊行している。その他、「Hongo Metaphysics Club」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の人文系学部間で、教員と院生がともに英語で研究発表をする BESETO 哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 教授・准教授

天野正幸（教授、ギリシャ哲学）  
高山守（教授、無という観点から哲学を読み解く）  
一ノ瀬正樹（教授、因果性の哲学・人格概念の研究）  
榊原哲也（教授、現象学・ドイツ現代哲学）  
鈴木泉（准教授、近世形而上学・現代フランス哲学）

### (2) 助教（2007年3月までは助手）の活動

吉田 聡  
在職期間 2007年度から2009年度まで  
研究領域 現象学を中心とした西洋哲学  
主要業績 『フッサールの自我論——〈他なるもの〉との相関における「私」の諸相——』、コンテンツワークス、2007年11月（オンデマンドパブリッシング）

### (3) 外国人教師の活動

Roger Robins（2008後期—2009年前期フルブライト講師、米国メアリマウント大学、宗教哲学）

### (4) 外国人研究員

Barbro Fröding（2009年後期、英国オックスフォード大学研究員）

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度  
「ヘーゲルの目的論——『大論理学』における「内的合目的性」概念の消極的・積極的規定」  
『道徳の系譜』におけるニーチェの良心論——やましい良心の多義性——」  
「世界が開けているとはどういうことか——ハイデガー『存在と時間』における世界と死」  
『存在と時間』における存在の問いの特色と現存在の歴史性」  
「初期フッサールに「意味」概念について」

「ベルクソンにおける生命と自由」  
「存在論的ヘーゲル解釈のために——アリストテレス『形而上学』による『精神現象学』読解の試み」  
「一面性に克服に向けて～承認論の現代的意義～」  
「カント哲学における概念と直観を巡って～時間における超越論的見解と経験的見解について」  
「存在論としての西田哲学」  
「アリストテレス『デアニマ』におけるプシューケーに関する考察」  
「名前について——プラトンの「クラティロス」から——」  
「クリプキの懐疑論——規則のパラドックス——」

#### 2009年度

「カントにおける自由」  
「ニーチェ：権力への意志と超人の思想」  
「デカルトにおける神の存在証明——第三省察を中心にして——」  
「経験の新しさとベルクソンの時間概念について」  
「ヒューム的人格同一性の議論について」  
「ロックにおける自然法について」  
「ウィトゲンシュタインと語り得る一得ないのゆくえ」  
「ジョン・ロックの自由の問題」  
「ホブズとロックの『自然状態』に対する一考察」  
「ジョン・ロックにおける政治社会形成の考察——同意の役割を中心に——」  
「デューイの社会的知性と民民主義的エートス——芸術によるコミュニケーションの可能性——」  
「ウィトゲンシュタイン研究——『論理哲学論考』における独我論について——」  
「フレーゲの文脈原理について」  
「ロックの人格論——意識と法廷——」  
「知識・理解・認識の価値」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

#### 2008年度

栗田草太郎「カントと神の存在証明——「汎通的規定の原則」の観点から」  
〈指導教員〉高山守  
丹羽健「現象学的語について——フッサールの言語記号理論の研究——」  
〈指導教員〉榊原哲也  
清塚明朗「初期ベルクソンの空間論」  
〈指導教員〉松永澄夫  
若島薫「ヒュームにおける道徳的価値とルール——道徳的ジレンマの施術的解明を目指して——」  
〈指導教員〉一ノ瀬正樹  
Chang Chit YEE「Chalmer's Theory of Phenomenal Consciousness」  
〈指導教員〉一ノ瀬正樹

#### 2009年度

島崎史崇「初期ハイデガーにおける遂行としての哲学」  
〈指導教員〉榊原哲也  
丸山文孝「ハイデッガーの自然への思惟」  
〈指導教員〉榊原哲也  
次田瞬「クワインの存在論的相対性テーゼとその再検討」  
〈指導教員〉一ノ瀬正樹  
相松慎也「ヒュームの自然的徳論」  
〈指導教員〉一ノ瀬正樹  
若松猛「ジュール・ラシュリエの自我について」  
〈指導教員〉松永澄夫  
本橋伊九生「現代ノエマ論への一視角」  
〈指導教員〉榊原哲也

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

近藤智彦「ストア派の運命論をめぐって——ヘレニズム・ローマ期の哲学における決定論と自由意志——」

〈主査〉天野正幸 〈副査〉松永澄夫・鈴木泉・今井知正・神崎繁  
池田喬「行為と世界——初期ハイデガー哲学の研究」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉高山守・松永澄夫・天野正幸・門脇俊介  
今村健一郎「ジョン・ロックの所有権論の研究」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉高山守・松永澄夫・鈴木泉・下川潔

2009 年度

(甲)

倉田剛「オーストリア哲学における命題的对象・モメント・非存在者——現代オントロジーの観点から——」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉一ノ瀬正樹・松永澄夫・鈴木泉・岡田光弘  
朝倉友海「スピノザ哲学における概念と個別性」

〈主査〉鈴木泉 〈副査〉松永澄夫・一ノ瀬正樹・佐藤一郎・村上勝三  
金子裕介「動機説の観点から見た倫理的判断の諸相」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉高山守・榊原哲也・鈴木泉・伊勢俊彦  
畠山聡「フッサールにおける他者および自己の身体の構成について——第五デカルト的省察の注釈と解釈——」

〈主査〉榊原哲也 〈副査〉高山守・松永澄夫・鈴木泉・貫成人  
手塚博「ミシェル・フーコーの人間学批判——実存と実践の哲学——」

〈主査〉松永澄夫 〈副査〉高山守・榊原哲也・鈴木泉・檜垣立哉  
伊東俊彦「社会を「閉じる」力・「開く」カール・レーンクの『道徳と宗教の二源泉』における社会論」

〈主査〉松永澄夫 〈副査〉高山守・榊原哲也・鈴木泉・安孫子信  
渡邊誠「出来事と時間」

〈主査〉松永澄夫 〈副査〉高山守・榊原哲也・鈴木泉・雨宮民雄

(乙)

榊原哲也「フッサール現象学の生成 その方法の成立と展開」

〈主査〉高山守 〈副査〉松永澄夫・熊野純彦・村田純一・浜渦辰二

## 05 倫理学

### 1. 研究室活動概要

人間存在、価値、道徳意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授4名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度5-6名程度）の協力のもとに、西洋と日本の主要な倫理思想を対象

とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2008年度12名、2009年度11名）。学科全体としてみれば、学生、院生あわせて50名ほどの学科だが、学生、院生の研究テーマも、古代ギリシャ哲学や古代ユダヤ教からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学や倫理学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年一回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、博士課程在籍中の院生の研究成果を発表する場となっている。また、本専修課程の卒業生を中心に「倫理学研究会」が組織され、年一回の定例会が行われており、そこでは倫理学の専門的な研究者のみならず社会人をもまじえた活発な研究交流がなされている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員の氏名・専門分野・在職期間

教授 竹内 整一

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 1998年4月－2010年3月

教授 関根 清三

専門分野 西洋倫理思想史・旧約聖書学

在職期間 1994年6月－現在

教授 菅野 覚明

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2005年1月－現在

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

助教 宮下 聡子

専門分野 心理学的倫理学・宗教的倫理

在職期間 2008年4月－現在

### (2) 2008～2009年度の助教の活動

宮下 聡子

在職期間 2008年4月－現在

研究領域 心理と倫理と宗教の接点

主要業績

(著書)

『ユングにおける悪と宗教的倫理』教文館、2009年11月、全259頁。

(論文)

「フランクフルトにおける「意味」の地平」『倫理学紀要』第16輯、東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室、2009年3月、1－26頁。

(科学研究費)

日本学術振興会平成21年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）「学術図書」

(学外非常勤講師)

2007年10月－2008年9月 横浜国立大学教育人間科学部

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 業論文題目一覧

2008年度

「宮沢賢治『ビザテリアン大祭』を検討する」

「御伽草子『さいき』における「やさし」と「うつくし」」

「ヘーゲルにおける意志と「客観」化」  
「トクヴィル『アメリカのデモクラシー』 個人主義と功利主義的道德原理」  
「石原莞爾の「新日本建設大綱」における弱者へのまなざし」  
「唯円の著作としての『歎異抄』」  
「宮沢賢治の倫理観——「銀河鉄道の夜」をめぐって——」  
「L. Wittgenstein における「理解」の問題について」  
「宮沢賢治の童話にみる農民観」  
「宮沢賢治『春と修羅』のかなしみ」  
「坂口安吾『吹雪物語』における夢と知性の接近」

#### 2009 年度

「『葉隠』における死の主体化」  
「三木清の「思想」について」  
「『靈能真柱』にみる平田篤胤の「大倭心」」  
「森鷗外の「傍観」について——『舞姫』から『かのように』を中心に」  
「ヘーゲルにおける「身体」と「他者」」  
「身体論／俳優の身体の二重性について」  
「岡倉天心『東洋の理想』について」  
「ルソーの市民宗教論——人間の義務の問題に関する考察——」  
「キェルケゴールの隣人愛～倫理的なものの可能性と宗教的なものの限界～」  
「福澤諭吉著『福翁百話』『福翁百余話』に於ける倫理的考察」  
「『道徳形而上学の基礎付け』の討議倫理学的研究の序説」  
「葉隠の活力」  
「他者への関係としてのことば——レヴィナス『全体性と無限』について——」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

#### 2008 年度

釜土詳二「生命における運命と運命における愛——生命との和解を巡る思索の可能性」  
〈指導教員〉熊野純彦  
田島卓「マルティン・ブーバーにおける世界と専一性」  
〈指導教員〉関根清三  
板東洋介「本居宣長における「奇異しさ」」  
〈指導教員〉菅野覚明

#### 2009 年度

佐野太郎「清沢満之の「自己」——「不如意」な中における営み——」  
〈指導教員〉竹内整一  
田中隆伯「レヴィナスにおける主体と超越——他者と時間をめぐり一考察——」  
〈指導教員〉熊野純彦

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

#### 2008 年度

(乙)

森一郎「死と誕生 ハイデガー・九鬼周造・アーレント」  
〈主査〉関根清三 〈副査〉竹内整一・熊野純彦・榊原哲也・田中久文

## 06 宗教学・宗教史学

### 1. 研究室活動概要

本専修課程(宗教学研究室)における研究は宗教についての経験科学的研究であり、現在の研究活動は、教授4、助教1、計5名の教官を中心として行われている。研究分野としては、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史(中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエント、近現代日本)、宗教調査(現代日本の諸宗教、宗教民俗)、発掘調査(イスラエル)、などをカバーしている。方法論的には、宗教現象学、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学などである(詳しくは、教授・准教授については本書第Ⅲ部を、助教については後述を参照のこと)。また毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、欠けている分野を補っている。

本専修課程では助教と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには毎号教官、院生、研究室OBなどの研究論文・書評・研究ノートなどが掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会(本専修課程創設時の主任教授、姉崎正治教授の雅号により潮風会と称する)誌的な性格をもち、OB(留学生を含む)の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業題目一覧などが常時載せられて研究室とOBとの交流が実現している。また潮風会は年に2回、学術大会時と年末に開催されるほか、随時講演会や研究会を持つことがある。

このほか、駒場からの進学者、大学院新入生の歓迎と研究室内の親睦を兼ねて、東京近隣の宗教施設の見学を含む一泊二日の研究室旅行が恒例となっている。

本専修課程の最近の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと(2008年度18名、2009年度18名)と外国からの留学生と外国への留学生が多くなっていること(2009年現在では、それぞれ4名と2名)、などの点もあげられる。これらの傾向は、研究室の活性化、また宗教研究の活性化や国際化のためには喜ばしいことである。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 2008～2009年度の在職者と専門分野

島 進：近代日本宗教史・宗教理論研究・比較宗教運動論(1987年4月～)

鶴岡 賀雄：西洋神秘思想、近現代宗教思想(1998年4月～)

市川 裕：一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語(1991年4月～)

池澤 優：中国宗教研究・祖先崇拜・生命倫理(1995年4月～)

高橋 原：ユング心理学・近代日本の知識人宗教(2007年4月～)

#### (2) 2008～2009年度の助手・助教の活動

高橋 原：(2008年4月～)：

(翻訳) 酒井直樹「否定性と歴史主義の時間——一九三〇年代の実践哲学とアジア・太平洋戦争期の家永・丸山思想史」『マルクス主義という経験——1930-40年代日本の歴史学』磯前順一・ハリー・D・ハルトゥーニアン編、青木書店、2008年4月、pp. 261-308。

「ユングへの共鳴」『遠藤周作 挑発する作家』柘植光彦編、至文堂、2008年10月、pp. 157-167。

「明治期知識人の宗教観と成瀬仁蔵」『日本女子大学総合研究所紀要』、2008年11月、pp. 36-54。

資料紹介「姉崎正治の国際連盟演説(1936年)」『東京大学宗教学年報』XXVI(=26)、2009年3月、pp. 9-12。

「近代の肖像-危機を拓く 加藤玄智(1)-(2)」『中外日報』27305, 27307号、2009年6月11, 16日。

(口頭発表)「鶴藤幾太の新神社観について」東アジア宗教文化学会第2回国際学術大会、於北海道大学、2009年8月17日。

(口頭発表)「明治期仏教とユニテリアニズム——佐治實然を手がかりに——」日本宗教学会第68回学術大会、於京都大学、2009年9月13日(『宗教研究』363号、2010年3月に要旨掲載)。

「日本の宗教教育論 解説」(共著者：島進・星野靖二)『日本の宗教教育論』各巻所収、クレス出版、2009年11月。

(資料紹介)「昭和二十年の宗教学研究室日誌」『東京大学宗教学年報』XXVII(=27)2010年3月、pp.3-13。



### (3) 2008～2009 年度の外国人教師の活動

なし

### (4) 2008～2009 年度に受け入れた内地研究員・外国人研究員の表

Edward Hoffman

土井裕人

池 映任

Christine Valentine

Marco Gottardo

Erez Joskovich

Marcie Anne Middlebrooks

Carl Freire

George Lazopoulos

Reem Ahmed Saleh Sayed Omar (研究生)

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目

2008 年度

「ファウスト（グレートヒェン悲劇）を読む」

「教誨・死刑制度から見る宗教」

「概念・暴力——資本主義の精神」

「生長の家の教団史、教祖自伝についての諸考察」

「音楽の宗教代替可能性について」

「四国遍路の過去と現在」

「日本におけるベジタリアニズムとその受容」

「オランダの多柱型社会の宗教学的考察」

「インドへ行く若者」

「いたみと女性性」

「宗教儀礼と音楽」

「妙好人浅原才市の宗教詩における「あの世」観について」

「レヴィ=ストロースによる構造主義：「変換」の概念」

「「私」と「友人」のはざままで 現代日本の若者たちのコミュニケーション群像」

「ロハスの思考——日本におけるロハスの特徴と諸問題」

「日本人の職業倫理」

「エマニュエル・レヴィナス「全体性と無限」について」

「柳田国男の思想」

「「死」の聖地のバナーラス」

「死別未経験者とグリーフケア」

2009 年度

「「学校の怪談」に関する一考察」

「レヴィ=ストロースによる構造主義：「変換」の概念」

「カクレキリシタンの信仰ムキリシタンからカクレキリシタンの連続性」

「サッカーと宗教——Jリーグにみる宗教性——」

「ニーチェとナチス——何故、ニーチェの思想はナチ・イデオロギーに利用されたのか——」

「パウロ・ティリッヒの信仰論とその成り立ち」

「宗教と利子」

「日本における政教分離を巡る諸問題とその考察」

「無縁墓」

「緊急事態における食人行為と宗教性について」

「日本のナショナリズムと天皇——来るべき多文化状況における天皇のリアリティ——」  
「ユダヤ法イスラーム法比較」

## (2) 修士論文執筆者・題目

2008年度

中島和歌子「近現代ブルターニュにおける新異教主義運動と文化——図像宗教学試論、螺旋状紋様「トリスケル」の受容と使用意図・意識を手がかりとして——」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

高橋渉「擬ディオニュシオス・アレオパギテースのキリスト像」

〈指導教員〉市川裕

袴田玲「グレゴリオス・パラマス研究——祈りにおける身体の振る舞い万人に開かれた神秘」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

2009年度

石山晃一郎「レヴィナスにおける「母性(maternité)」～その宗教的意義の探求～」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

古泉浩平「聖者性と神秘主義」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

濱田倫子「画像石墓における"死者の中心性"について——漢代中国のコスモロジー分析を通じて——」

〈指導教員〉池澤優

上間励起「ジャマイカの宗教運動における記憶と抵抗——ラスタファリアニズム運動を中心に」

〈指導教員〉池澤優

野口孝之「ルドルフ・シュタイナーにおけるドイツ哲学と神智学」

〈指導教員〉鶴岡賀雄

Hrn Il Myung (明願生)「終末期医療における宗教実践——マザーテレサ「死の家」と長岡西病院の事例を通して——」

〈指導教員〉島菌進

## (3) 博士論文執筆者・題目

2008年度

(甲)

Mira Sonntag「大正期日本における合理主義と救済——1918～19年のキリスト再臨待望運動の「厚い記述」」

〈主査〉島菌進 〈副査〉市川裕・苅部直・池澤優・久保田浩

李勝鉉「柳宗悦の宗教思想の研究——信と民と美をめぐる——」

〈主査〉島菌進 〈副査〉鶴岡賀雄・竹内整一・池澤優・藤井健志

(乙)

堀江宗正「心理学のなかの「宗教」——ポスト「宗教」・ポスト世俗主義の心理学的思想運動」

〈主査〉島菌進 〈副査〉鶴岡賀雄・深澤英隆・渡辺学・西平直

2009年度

(甲)

北沢裕「死後世界旅行記の研究——西欧中世からの系譜とその普遍的機能の考察——」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉島菌進・小池寿子・河東仁・渡辺和子

井上まどか「ロシア〈帝国〉の宗教と政治——帝政期から現代まで」

〈主査〉島菌進 〈副査〉鶴岡賀雄・市川裕・袴田茂樹・深澤英隆

(乙)

出村みや子「聖書解釈者オリゲネス——復活をめぐる論争を中心として」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉市川裕・宮本久雄・大貫隆・佐藤研

## 07 美学芸術学

### 1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方で日本の学会における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、この2年間に受け入れた外国人研究生は1名、また大学院生は1名である。

本研究室では現在 *JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics)* と題された欧文の紀要 (1976年創刊) と『美学芸術学研究』(1982年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995年改題) と題された和文の紀要の2つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、大学院での演習 *Colloquium aestheticae* ではアラン・カールソン (カナダ・アルバータ州立大学名誉教授)、高建平 (中国社会科学院教授) など著名研究者を迎え、海外との学術交流に努めている。なお、本研究室では現在、美学会の本部・事務局を担当しており、名実ともに日本における芸術研究の拠点としての役割を担っている。

### 2 構成員・専門分野

(1) 2007年12月以降渡辺裕教授 (在籍は1996年～。音楽美学、音楽文化史) が人文社会系研究科文化資源学研究室に移ったが、しかし文学部のほうでは、これまでと同じく美学芸術学研究室のスタッフとして教育・研究に携わっている。また、2008年4月に安西信一准教授 (庭園美学、環境美学) を新たに迎え、西村清和教授 (在籍は2004年～。現代美学)、小田部胤久教授 (在籍は1996年～。近代美学、感性文化論) とともに4名の教員スタッフによってバランスのとれた教育活動ができるように努力している。

#### (2) 助教の活動

太田 峰夫

在職期間 2009年4月1日～現在

研究領域 音楽学

主要業績

論文 「バルトーク・ベーラの活動における文化ナショナリズムとモダニズム——創作活動における「農民音楽」の役割をめぐって」、博士論文 (東京大学大学院人文社会系研究科)、2009年10月15日受領。

学会発表・講演

「記譜の精密化と「プリミティヴなるもの」の「創造」——バルトークの民謡研究にお

るフォノグラフの役割について」、第 60 回美学会全国大会（東京・東京大学）2009 年 10 月 12 日。

「民族楽器」と 19 世紀ハンガリーのナショナリズム」、中央大学クレセント・アカデミー総合講座「もうひとつのヨーロッパ」、東京・中央大学、2009 年 12 月 12 日。

「19 世紀ハンガリー市民社会におけるツィンバロムの「受容史」について」、大阪大学グローバル COE プログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」「音楽の生産・流通・消費におけるコンフリクト」プロジェクト研究会、大阪・大阪大学、2009 年 12 月 18 日。

#### 社会活動

国士舘大学文学部非常勤講師

群馬県立女子大学文学部非常勤講師

NHK 文化センター柏校講師

美学会東部会編集幹事

### (3) 外国人研究員

なし

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008 年度

「『ゲルハルト・リヒターの絵画におけるぼかしの意味』」

「鳥山明作品の特質及び戦後日本マンガ史における意義についての考察」

「行定勲の映画表現について——『世界の中心で、愛をさけぶ』を中心に——」

「映像メディア/イメージとしての YouTube——情報と象徴」

「西洋近代芸術音楽における作品同一性に関する考察」

「額縁論再考——近代日本における西洋額縁の文化——」

「安藤忠雄の教会建築——日本人のキリスト教観を通じて——」

「ヴァルター・ベンヤミンにおける「アウラ」概念について」

「ポピュラー音楽におけるライブ聴取の様態」

「ジャズの即興演奏における自由」

「泉鏡花の〈視覚〉と〈聴覚〉——文章が創り出す物語空間」

「小林秀雄、批評方法の変遷——初期作品を中心に」

「1970 年代日本におけるロック受容の一側面——ロック・ジャーナリズムにみるプログレッシヴ・ロックの表象——」

「ニュー・ミュージコロジー以降のクラシック音楽演奏の可能性について」

「芸術としての自殺の可能性～三島由紀夫をめぐる～」

「デューイにおける〈芸術〉概念について」

「現代日本における廢墟の美学」

「モダン日本のメロドラマ的想像力と「越境」アルゼンチン/タンゴをめぐる言説分析」

「さまよう作家と快活な言葉たち——『私についてこなかった男』における文学的探求——」

「大英博物館——グレーコートに至る博物館建築とミュージアム像——」

「十七世紀オランダ絵画の解釈論について——学説の捉え直しと解釈基準の探求——」

「竹久夢二におけるアール・ヌーヴォー様式」

2009 年度

「『動作の形式』—サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』における動作」

「SFアニメの変遷について」

「『ホテル・ニューハンプシャー』という家族」

「N.グッドマンにおける芸術と世界制作」

「占領期黒澤明試論」

「柳宗悦における生活と美——「工藝」の視点から——」

「現代日本における笑芸の分析」  
「ベンヤミンの複製芸術論の現代における可能性」  
「初音ミク現象に予感する、クリエイティビティの新しいあり方～超平面化する世界の超克の兆候～」  
「バレエ上演における演出の意味——「ジゼル」を中心に——」  
「ミュージック・ビデオの経験像」  
「戦後日本現代音楽におけるアジア志向——西村朗の作品に即して——」  
「我国におけるコンピレーション・アルバムの変容——タイアップ音楽の影響を中心に」  
「映画批評における間テキスト性について——ウディ・アレン『カメレオンマン』（1983）をめぐる批評に即して——」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

今井晋「トラックとしてのロック・ミュージック作品に関する存在論的考察」

〈指導教員〉西村清和

櫻井一成「ポール・リクールの解釈学——詩的言語の解釈と自己理解の結びつき——」

〈指導教員〉小田部胤久

松崎裕子「フランス古典主義絵画論再考——「expression」概念の用法にみられるアカデミーの絵画論の特質について——」

〈指導教員〉小田部胤久

遠藤知裕「1960年代以後のアートにおける写真——絵画の「交差」——クロス、リヒター、ホックニー、ウォールをめぐる」

〈指導教員〉西村清和

李惠珍「シュスターマンのプラグマティスト美学の意義——美学における自然主義と歴史主義の対立とその代案としてのプラグマティスト美学」

〈指導教員〉西村清和

2009年度

中川航「チェルニーのピアノ演奏理論におけるテンポの位置づけ——楽譜と演奏のはざままで——」

〈指導教員〉小田部胤久

石崎佑子「小林一三の国民劇概念と宝塚歌劇——歌舞伎劇と歌劇の関係を中心に——」

〈指導教員〉小田部胤久

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

川瀬智之「メルロ＝ポンティにおける〈存在〉の構造——「奥行き」と「同時性」の概念の展開を手がかりに——」

〈主査〉西村清和 〈副査〉小田部胤久・渡辺裕・松永澄夫・安西信一

東口豊「Th.W.アドルノの美学思想における「自然」

〈主査〉小田部胤久 〈副査〉藤田一美・庄野進・西村清和・渡辺裕

2009年度

(甲)

大愛崇晴「16・17世紀のイタリアにおける数学的音楽理論の展開——協和音とその知覚の問題を中心に——」

〈主査〉渡辺裕 〈副査〉西村清和・安西信一・ヘルマン・ゴチェフスキ・津上英輔

太田峰夫「バルトーク・ベーラの活動における文化ナショナリズムとモダニズム——創作活動における「農民音楽」の役割をめぐる」

〈主査〉渡辺裕 〈副査〉西村清和・安西信一・長木誠司・伊東信宏

## 08 心理学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授4名、助教1名、日本学術振興会のPD・研究生・大学院生・学部生ら約80名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・思考などの心理現象を精神物理学的手法・神経科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。また、文化認識や科学方法論などについても研究を行っている。毎年、教養学部文科3類や理科1・2類から約25名の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトや実験動物を被検体として実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教官の指導の下に実験的研究を行い、その成果を取りまとめている。

大学院教育に関しては、本専修課程の教官のみならず、大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系の認知行動科学に所属する心理学系教官の参加を得て、指導体制の充実を図っている。毎年、数名の課程博士（博士（心理学））が誕生している。

本専修課程の教官は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本動物心理学会・日本視覚学会・日本生理学会・日本神経科学学会・日本認知心理学会・日本認知科学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

佐藤 隆夫

専門分野 知覚心理学

在職期間 1995年5月～ 人文社会系研究科助教授  
1995年12月～現在 同 教授

高野 陽太郎

専門分野 認知心理学

在職期間 1990年4月～ 人文社会系研究科助教授  
2003年4月～現在 同 教授

立花 政夫

専門分野 視覚神経科学

在職期間 1988年10月～ 文学部助教授  
1994年1月～ 同 教授  
1995年4月～現在 大学院人文社会系研究科教授

横澤 一彦

専門分野 高次視覚

在職期間 1998年10月～ 人文社会系研究科助教授  
2006年4月～現在 同 教授

#### (2) 2008～2009年度の助教の活動

瀬山 淳一郎

専門分野 知覚心理学

在職期間 1998年4月～現在

主要業績 Seyama, J., & Nagayama, R. S. (2009). Probing the uncanny valley with the eye-size aftereffect. *Presence: Teleoperators and Virtual Environments*, 18 (5), 321-339.

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008 年度

- 「Stream/Bounce 知覚における運動統合の時間的要因」
- 「音列の拍節構造と行動の時間精度の関係」
- 「遮断された物体の認知における影の効果」
- 「他者による指差しが示す空間範囲の知覚」
- 「光源運動による陰影の変化に伴う奥行き知覚について」
- 「日常物体の方向知覚に関係する神経基盤～fMRI による検討」
- 「記憶検索に関する認知心理学的研究」
- 「既知の曲の演奏しやすさに影響を及ぼす音響パラメータの検討」
- 「ダイナミックランダムドットステレオグラムを用いた視差情報の時間周波数特性の検討」
- 「記憶保持時の眼球運動の特性に関する研究」
- 「両眼視差と運動視差を組み合わせた場合の奥行き対比効果」
- 「病変部位の視覚探索における出現頻度の影響に関する研究」
- 「能力の自己評価が分配行動に与える影響」
- 「基準率錯誤の新しい解析：等確率仮定仮説の検証」
- 「楽譜を構成する要素の反転・逆行が熟達者の初見試奏の精度に及ぼす影響」
- 「1 次運動経路からのヴェクシオン生起」
- 「提示時間の違いが視線方向判断と視線受信に与える影響」
- 「怒りと恐怖がリスク認知、ベネフィット認知に及ぼす影響」
- 「多次元ルールによる視覚パターンのカテゴリ分類に関する研究」
- 「色彩嗜好における共通性と特殊性の検討」
- 「動く顔の知覚の空間周波数特性」
- 「表情が認知課題パフォーマンスに与える影響」
- 「小光点光源の能動的操作による奥行き知覚」
- 「運動誘動性盲と疑似盲点への知覚的充填の共通性」
- 「運動刺激の知覚方向に影響を及ぼす周辺情報の特性」

2009 年度

- 「色残像の充填現象に関する形状の効果」
- 「曖昧性の総量が曖昧性忌避の効果の大きさに与える影響について」
- 「感情の性質がリスク認知における情報処理方略の決定に及ぼす影響」
- 「自己による触刺激が身体図式に与える影響」
- 「言語の短期・長期記憶に及ぼすメロディの影響」
- 「刺激の奥行き構造が Motion binding 知覚に与える影響」
- 「既存情報の抑制による符号化時の干渉解消」
- 「読影専門家による病変部位の視覚探索における出現頻度効果に関する研究」
- 「能動的な身体運動情報が速度知覚への影響について」
- 「視線の中心知覚と視線受信の関係」
- 「刺激の知覚的 onset に対する感度が属性間運動対象追跡の時間限界に及ぼす効果」
- 「基準率錯誤の生じる原因の検討 因果関係による説明」
- 「自己運動が運動視差に対して与える影響 —奥行き知覚と運動知覚の分離について—」
- 「ディストラクターの活性化がターゲットの検索効率に与える影響 —刺激の類似性からの検証—」
- 「外国語の使用が非言語的表出に及ぼす影響について」
- 「刑事裁判における強力な証拠が一般市民の判断に及ぼす影響」
- 「ハイブリッドイメージにおけるスケールインヴァリアンスの検討」
- 「外国語副作用が生起する処理段階に関する実験的研究」
- 「道具の使用に関する神経基盤: fMRI による検討」
- 「物体嗜好が色彩嗜好に与える影響」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

綿村英一郎「一般人の量刑判断に関する実験的検討」

〈指導教員〉高野陽太郎

林姿呈「異言語表現によるテキスト理解に伴う思考力の変化」

〈指導教員〉高野陽太郎

2009 年度

田中雅史「キンギョ網膜双極細胞におけるシナプス出力の解析」

〈指導教員〉立花政夫

常岡充子「他視点取得と攻撃行動」

〈指導教員〉高野陽太郎

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

新美亮輔「日常物体の方向感覚に関する実験心理学的研究」

〈主査〉横澤一彦 〈副査〉立花政夫・佐藤隆夫・高野陽太郎・渡邊克巳

西村聡生「刺激反応適合性における刺激表象に関する実験心理学的研究」

〈主査〉横澤一彦 〈副査〉立花政夫・佐藤隆夫・高野陽太郎・北崎充晃

浅野倫子「単語認知における文脈の果たす役割に関する実験心理学的研究」

〈主査〉横澤一彦 〈副査〉立花政夫・佐藤隆夫・高野陽太郎・今井むつみ

時本真吾「日本語文処理における作動記憶制約の関わり」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉横澤一彦・荻阪直行・玉岡賀津雄・広瀬友紀

2009 年度

(甲)

妹尾武治「視覚運動刺激の特性操作に基づくベクシオンメカニズムの検討」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・高野陽太郎・横澤一彦・北崎充晃

有賀敦紀「視覚的注意の時間特性——注意の目覚め現象を手がかりとした実験心理学的研究——」

〈主査〉立花政夫 〈副査〉佐藤隆夫・高野陽太郎・渡邊克巳・河原純一郎

## 09 a 日本語日本文学（国語学）

### 1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に



由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続いてきたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほかに、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げることになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の間として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、現在、大学院生2名、大学院研究生2名、計4名の外国人留学生が本専修課程に在籍しており、日本人大学院生と活発に交流を行っている。また、海外の日本語研究者が5名、文学部外国人研究員として本研究室に在籍し、研究に従事している。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 構成員・専門分野

鈴木 泰	教授	日本語文法史	2003年4月～2009年3月
尾上 圭介	教授	日本語文法論	1989年4月～現在
月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～現在
井島 正博	准教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	准教授	日本語史	2003年4月～現在

### (2) 2008～2009年度の助教の活動

柳原 恵津子	1975年9月23日生
在職期間	2005年4月～2010年3月
研究領域	日本語史
主要業績	・「東京大学国語研究室蔵『仮名論語』について（一）」 『日本語学論集』第5号 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室 2009.3 ・「『後二条師通記』冒頭三カ年分の「本記」と「別記」について」 『古典語研究の焦点 一武蔵野書院創立90周年記念論集一』武蔵野書院 2010.1 ・「東京大学国語研究室蔵『仮名論語』について（二）」 『日本語学論集』第6号 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室 2010.3
学外活動	青山学院大学非常勤講師（2007年度～現在） 日本語学会庶務委員（2005.6～2010.5）

### (3) 2008～2009年度に受け入れた内地研究員・外国人研究員

アルベリッツィ・ヴァレリオ・ルイジ（受入教員：月本雅幸）
研究題目：仏書訓点資料の研究
研究期間：2008年4月～2009年3月

李準煥（受入教員：肥爪周二）

現職：ソウル産業大学、韓神大学、尚志大学非常勤講師

研究題目：近代国語漢字音の体系と変化

研究期間：2008年9月～2009年8月

ジョン・ホイットマン（受入教員：月本雅幸）

現職：コーネル大学教授

研究題目：平安初期訓点資料と古代朝鮮の口訣との比較研究

研究期間：2008年8月～2009年8月

呉美寧（受入教員：月本雅幸）

現職：崇實大学校副教授

研究題目：小学の訓読に関する日韓比較研究

研究期間：2009年4月～2010年1月

アルベリッツィ・ヴァレリオ・ルイジ（受入教員：月本雅幸）

研究題目：漢文訓読語に関する文体史的研究

研究期間：2009年4月～2011年3月

李丞宰（受入教員：月本雅幸）

現職：ソウル大学校教授

研究題目：古代日韓における漢文訓読の比較研究

研究期間：2009年9月～2010年8月

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「熟語における仮名と漢字の混ぜ書きを巡って」

「非動名詞型サ変動詞の諸問題」

「漢語サ変動詞の語構成について」

「鎌倉幕府裁許状における宣命体表記について」

「『東大国語研究室蔵白氏文集第四影写本』の研究」

「疑問詞を用いた問いかけ表現」

「疑問表現におけるウ・ダロウの表現効果」

「疑問文と文末の「か」の関係について」

「補文標識「と」「の」「こと」の使い分けについて」

2009年度

「漫才芸の笑いを生む会話の型に関する研究」

「助詞への古代語と現代語の用法の差異に関する研究」

「江戸期における調理動詞について」

「広義推量表現の意味・用法に関する研究」

「広義パーフェクトのシタ形とシテイル形の比較研究」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

小竹妙「空間相対名詞の研究」

〈指導教員〉鈴木泰

佐藤奏「宮城県登米市方言のアクセント——活用形・付属語アクセントを中心に——」

〈指導教員〉井島正博

林淳子「動詞テ形派生の後置詞の機能に関する研究」

〈指導教員〉鈴木泰

2009年度

林禎映「評価性をもつ副詞の意味用法に関する研究」

〈指導教員〉井島正博

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

石山裕慈「中世日本漢字音における声調の研究」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉鈴木泰・藤原克己・井島正博・肥爪周二

成珣珂「近代日本語資料としての朝鮮語会話書：明治期朝鮮語会話書の特徴とその日本語」

〈主査〉月本雅幸 〈副査〉鈴木泰・尾上圭介・肥爪周二・福井玲

2009 年度

なし

## 09b 日本語日本文学（国文学）

### 1. 研究室（専修課程）等の活動の概要

本専修課程は、明治 20 年（1887）和文学科として発足したが、大正 8 年（1919）に国文学科と改称、昭和 38 年（1963）に国語国文学専修課程となり、昭和 50 年（1975）には国語学と国文学に専修課程を分かった。平成 6 年（1994）、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。ただし、実際の教育研究活動は、国語学とは独立しておこなっている。長い歴史のなかで学界に多大の貢献を成し遂げ、広い分野を活動範囲にしつつ、数多くの人材を送り出している。平成 21 年（2009）4 月現在の教員数は教授 4 名・准教授 1 名・助教 1 名であるが、学外から毎年非常勤講師を招聘して開講科目の充実をはかっている。

教養学部からの進学は、年度によって変化はあるがおおよそ 15～30 名の範囲におさまるのが通例である。専攻は様々な時代・ジャンルにわたっており、それぞれの関心に従って学習・研究を行っているが、同時に個別の時代やジャンルにとらわれない、広い展望を持つことを心がけるよう指導している。

日常の研究教育活動のほかに、2 年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の現地調査に努めている。

学会としては、国文学科時代以来の卒業生を中心に組織されている東京大学国語国文学会があり、毎年、評議員会と大会の開催、会報の発行、月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を国語研究室と共同で行なっている。また研究室の研究誌「東京大学国文学論集」を毎年刊行し、その内容は UTリポトリで公開している。

現在、国文学研究室には、大学院学生 53 名（内、外国人留学生 12 名）・学部学生 46 名（内、外国人留学生 2 名）が在籍し、その他、大学院研究生 7 名（すべて外国人留学生）・日本学術振興会特別研究員 1 名が在籍している。また多くの外国人研究員を受け入れ、教員が海外の学会の招待講演を引き受けるなど、国際交流に積極的に協力している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

2008～2009 年度在職

多田 一臣 教授 日本古代文学

長島 弘明 教授 日本近世文学

藤原 克巳 教授 平安朝文学  
渡部 泰明 教授 日本中世文学・和歌文学  
安藤 宏 准教授 日本近代文学

## (2) 助教の活動

河野 龍也

在職期間 2008年4月～2010年3月（実践女子大学文学部専任講師に転出）

研究領域 日本近代文学

主要業績 「ハーンの視聴覚描写と日本理解—紀行・怪談から『日本—一つの解明』まで—」（平川 祐弘・牧野陽子編『講座小泉八雲Ⅱハーンの文学世界』新曜社、2009年11月）  
『田園の憂鬱』成立考—〈芸術的因襲〉の位置づけをめぐる—」（『東京大学国文学論集』4号、2009年3月）  
「佐藤春夫「女誠扇綺譚」論—或る〈下婢〉の死まで—」（『日本近代文学』75集、2006年10月）  
「佐藤春夫「五月」から『田園の憂鬱』へ—〈祈祷〉を描くという戦略—」（『国語と国文学』83巻8号、2006年8月）  
「佐藤春夫の詩情とハーン—「田園の憂鬱」と〈詩人〉ハーンのアニミズム」（『國文學・解釈と教材の研究』49巻11号、2004年10月）  
「自我の明暗—佐藤春夫の〈詩〉と初期小説」（『国語と国文学』81巻1号、2004年1月）  
学外活動 白百合女子大学非常勤講師（2008・2009年度）

## (3) 内地研究員・外国人研究員・日本学術振興会特別研究員

内地研修員

2008年度

揖斐 高（受入教員：長島弘明） 成蹊大学文学部教授

2009年度

近藤 みゆき（受入教員：渡辺泰明） 実践女子大学文学部教授

外国人研究員

2008年度

モラル, ニコラ（受入教員：安藤宏） ジュネーヴ大学教員（2009年度まで）

コンステブル, オリヴァー（受入教員：藤原克巳） ジュネーヴ大学教員（2009年度まで）

李 光貞（受入教員：藤原克巳） 山東師範大学教員（2009年度まで）

2009年度

オルシ, マリア テレサ（受入教員：藤原克巳） ローマ大学教員

日本学術振興会特別研究員

2008年度

湯浅 幸代（受入教員：藤原克巳） PD

2009年度

岡田 万里子（受入教員：長島弘明） RPD

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「東関紀行」論

「江戸の怪談の表現——四世鶴屋南北の歌舞伎と初代林屋正蔵の落語を中心に——」

「鴨長明の仏教思想」

「牧野信一と「十三人」」

「『本朝二十不孝』研究」

「吉行淳之介『暗室』論」

「遠藤周作とその信仰」

「兼好論」  
「宮内卿論」  
「『源氏物語』の女性と花」  
「三島由紀夫『仮面の告白』——語り手「私」の現実——」  
「谷崎潤一郎「母恋い」論」  
「遠藤周作の「私小説」——宗教と文学の二律背反——」  
「『坊つちやん』論 あだ名を通して見えるもの」  
「香川景樹の歌風」  
「『沙石集』論」  
「河竹黙阿弥の白浪物」

#### 2009年度

「三島由紀夫の『金閣寺』論」  
「『宇治拾遺物語』論～百鬼夜行を巡って～」  
「堀辰雄論——鳥料理』を中心に」  
「五味川純平『人間の條件』論——「センチメンタル・ヒューマニスト」としての梶——」  
「『日本霊異記』上巻第四縁の成立——『霊異記』の意図——」  
「川端康成の初期活動——『伊豆の踊子』を中心に——」  
「『閑居友』における不浄観について」  
「横光利一にみる新感覚派文学の映像性について」  
「『宇治拾遺物語』収載の仏教説話の特質について」  
「源氏物語の女君——結婚と愛情をめぐる価値観の男女差」  
「式子内親王論」  
「三島由紀夫のドラマトゥルギー——「小説」と「戯曲」の位相——」  
「源氏物語玉鬘十帖論」  
「横光利一<病妻もの>論」  
「『夜の寢覚』研究」  
「太宰治「お伽草子」論」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

#### 2008年度

釜田共実「源経信の和歌」  
〈指導教員〉渡部泰明  
立木宏哉「明恵論——夢を中心として——」  
〈指導教員〉渡部泰明  
中西翔「平安朝物語文学の男と女」  
〈指導教員〉藤原克巳  
平山茂樹「武田泰淳『風媒花』論」  
〈指導教員〉安藤宏  
大石紗都子「堀辰雄と王朝文学」  
〈指導教員〉安藤宏  
田宮裕子「万葉集相聞歌論——恋の障害をめぐる——」  
〈指導教員〉多田一臣  
名木橋忠大「立原道造研究」  
〈指導教員〉安藤宏  
林悠子「源氏物語の時間——宇治十帖を中心に——」  
〈指導教員〉藤原克巳  
宮木慧太「近世遊里文芸の研究」  
〈指導教員〉長島弘明  
目黒文乃「森鷗外——明治四十年代を中心に——」  
〈指導教員〉安藤 宏

片龍雨「四世鶴屋南北作曾我狂言の研究」

〈指導教員〉長島弘明

2009 年度

鈴木崇大「古代和歌の構造と抒情」

〈指導教員〉多田一臣

平林慶尚「戦争文学としての大岡昇平」

〈指導教員〉安藤宏

李相旻「頓阿の研究」

〈指導教員〉渡部泰明

大野優「平安期文学におけるレトリックの研究——掛詞的表現を中心に——」

〈指導教員〉藤原克巳

尾葉石真理「「正治初度百首」論」

〈指導教員〉渡部泰明

川上知里「『今昔物語集』論」

〈指導教員〉渡部泰明

權桃楹「源氏物語第二部の男君たち——その懸想心を中心に——」

〈指導教員〉藤原克巳

山田恵子「正宗白鳥論」安藤宏

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

金丸(長瀬)由美「源氏物語と平安朝漢文学の研究」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・長島弘明・渡部泰明・肥爪周二  
金静熙「源氏物語論——物語の構造と方法——」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・安藤宏・井島正博  
君嶋亜紀「中世和歌表現論」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉多田一臣・長島弘明・藤原克巳・月本雅幸  
中野貴文「『徒然草』文学史論」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉多田一臣・長島弘明・鈴木泰・安藤宏  
出口智之「幸田露伴研究——「文学」概念の再検討を中心に——」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉多田一臣・長島弘明・藤原克巳・渡部泰明  
金弘來「源氏物語の人物と話型」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・長島弘明・渡部泰明・安藤宏  
光延真哉「近世中後期江戸歌舞伎の研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・古井戸秀夫・安藤宏

2009 年度

(甲)

金季籽「横光利一文学研究——表現形式としての「小説」——」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉多田一臣・長島弘明・渡部泰明・藤原克巳  
中村ともえ「谷崎潤一郎研究——近代小説の条件」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉井上健・多田一臣・長島弘明・井島正博  
清水由美子「読み本系平家物語研究」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉多田一臣・藤原克巳・肥爪周二・小島孝之  
荒井裕樹「病者と障害者の文学における自己認識と自己表現の諸相」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉竹内整一・佐藤健二・藤原克巳・渡部泰明  
河野龍也「佐藤春夫研究」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤井省三・多田一臣・長島弘明・藤原克巳  
佐藤淳一「谷崎潤一郎論〈型〉と表現」

〈主査〉安藤宏 〈副査〉藤原克巳・渡部泰明・野崎歆・井島正博

大屋多詠子「馬琴小説と演劇」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・古井戸秀夫・安藤宏

(乙)

島内裕子「徒然草文化圏の生成と展開」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉多田一臣・藤原克巳・長島弘明・佐藤康宏

平沢竜介「王朝文学の形成」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・長島弘明・渡部泰明・菅野覚明

田仲洋己「中世前期の歌書と歌人」

〈主査〉渡部泰明 〈副査〉多田一臣・藤原克巳・月本雅幸・逸身喜一郎

## 10 日本史学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近来では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野——考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など——の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

従来、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきたが、現在の教員数は、教授5名、准教授2名、助教1名に留まっている。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、極めて多忙な研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊。6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996年創刊。現在13号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事や評議員として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2009年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に8名、研究生に4名が在籍した。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

吉田伸之	教授	日本近世史
村井章介	教授	日本中世史
藤田 覚	教授	日本近世史
佐藤 信	教授	日本古代史
野島(加藤)陽子	教授	近代日本政治史
大津 透	准教授	日本古代史
鈴木 淳	准教授	日本近代史

### (2) 助教の活動

川越 美穂 2010年3月まで在職

研究領域 日本近代史

主要業績 「政治と聖蹟」(鈴木淳編『史跡で読む日本の歴史』吉川弘文館) など

### (3) 内地研究員・外国人研究員

#### (1) 人文社会系研究科研究員

2008年度 伊川 健二

2009年度 松田 忍

#### (2) 私学研修員

2008年度 井川 克彦 日本女子大

西川 誠 川村学園女子大

2009年度 前田 禎彦 神奈川大学

#### (3) 国内研究員

2008年度 朴沢 直秀

#### (4) 特別研究員

2008・2009年度 官田 光史

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「近世後期における江戸地廻り醤油の流通」

「近世後期伊予国における農間余業の構造——寛政五年吉田藩紙騒動を題材に——」

「近代日本における皇室制度の再編に関する一考察」

「都市計画法——池田宏の構想と挫折——」

「大正期大都市制度の展開と都市研究会」

「九州探題今川了俊の南九州経略」

「明治初年の斗南藩政についての一考察」

「明治二六年の三多摩移管」

「古代駅伝制の特質」

「大正期新聞社の文化事業」

「日本古代の対外関係と国家」

「大正・昭和初期の“理想的公民像”に関する一考察」

「近世下野の煙草生産・流通に関する考察——大山田煙草を中心に——」

「古代国家における弁官の特質」

「幕末期、知多郡東浦における流通と社会」

「大正末期の政党政治——政友本党の政治的位相」

2009年度

「福岡県における第2回総選挙の分析」

「稲村公方・篠川公方と東国政治情勢」



「明治41年初頭に起こった原油関税改正議論」  
「明治二十年代前半の埼玉県道路行政——熊谷大宮郷間道路開削問題から考察するそのイデオロギーの変化——」  
「戦間期の技術者運動」  
「明治後期における日刊紙・戸別配達網の形成過程」  
「小田原藩領における川除普請訴願について」  
「1910年前後の蚕種統一運動」  
「「房相一和」前後における里見氏と北条氏の関係について」  
「南北朝期における熊野海賊の活動について」  
「幕末江戸における蕎麦の供給」  
「奥州藤原氏滅亡の意義」  
「寛政度内裏普請と御用木請負」  
「鎌倉幕府の狩猟とそれに関する諸政策について」  
「日露戦後の税制と地域社会」  
「木曾のお六櫛に見る近世工業の展開と地域」  
「鈴木商店破綻に至る経緯」  
「中世堅田経済と本福寺教線」  
「織田政権における徳川家康の政治的立場」  
「江戸前中期における長崎開港について」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

世良田英靖「日露戦後における東京府の青年会組織化とその活動」  
〈指導教員〉鈴木淳  
立本紘之「昭和初期プロレタリア文化運動とその周辺」  
〈指導教員〉野島陽子  
松田暁子「近世会津藩における国産品政策と流通」  
〈指導教員〉吉田伸之  
山本祥隆「律令国家と出挙」  
〈指導教員〉佐藤信  
渡邊拓也「陸奥国信夫・伊達両郡における広域支配制度の基礎的研究」  
〈指導教員〉吉田伸之  
大高広和「古代日本辺境政策の研究」  
〈指導教員〉佐藤信  
熊坂友雅「中近世移行期の上方茶道ネットワークと宇治茶師」  
〈指導教員〉村井章介  
志賀桜子「二十世紀初頭における府県社以下神職」  
〈指導教員〉鈴木淳  
十河靖晃「織豊期宇喜多氏の備作支配と中央政権」  
〈指導教員〉村井章介  
千葉拓真「加賀藩をめぐる朝幕藩関係の研究」  
〈指導教員〉藤田覺  
山本ちひろ「「水産立県」の可能性——龍潭同窓会の国立水産学校設置請願運動——」  
〈指導教員〉野島陽子  
湯川文彦「明治初期地方行政制度創成過程の研究」  
〈指導教員〉鈴木淳  
瀬尾巧「謀叛と違勅に関する一考察」  
〈指導教員〉村井章介

2009年度

安田智昭「近世後期における紅花の集荷組織と流通構造」

- 〈指導教員〉吉田伸之  
太田仙一「初期三菱の人材育成策——教育事業を中心として——」  
〈指導教員〉鈴木淳  
倉本大樹「鎮西探題の使節と守護」  
〈指導教員〉村井章介  
谷口雄太「中世吉良氏の研究」  
〈指導教員〉村井章介  
藤田壮介「幕末維新时期尾張藩の産物統制政策」  
〈指導教員〉吉田伸之  
前田亮介「日清戦争後の経済と政治」  
〈指導教員〉野島陽子  
屋良健一郎「琉球王国の大和文化受容の過程とその背景」  
〈指導教員〉村井章介  
吉井文美「一九三〇年代東アジアにおける日本と英連邦の相剋——経済権益と貿易をめぐる交渉の展開——」  
〈指導教員〉野島陽子  
若山太良「一九世紀前半における幕府政策の基礎的研究」  
〈指導教員〉吉田伸之  
金蓮玉「長崎「海軍」伝習」  
〈指導教員〉鈴木淳

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

- 楊典銀「近代中国における日本人軍事顧問・教官並びに特務機関の研究（1898～1945）」  
〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉鈴木淳・吉澤誠一郎・山田朗・土田宏成  
佐々田悠「古代国家地方祭祀の研究」  
〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・島菌進・多田一臣・山口英男  
松田忍「(農業者団体) 系統農会と近代日本——1900年～1943年——」  
〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉鈴木淳・武田晴人・有馬学・大門正克  
李啓彰「近代日中外交の黎明——日清修好条規の締結過程から見る——」  
〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉鈴木淳・川島真・西川誠・千葉功  
池田勇太「維新変革と儒教的理想主義」  
〈主査〉鈴木淳 〈副査〉藤田覺・三谷博・小島毅・野島(加藤)陽子

(乙)

- 松方冬子「オランダ風説書と近世日本」  
〈主査〉吉田伸之 〈副査〉藤田覺・横山伊徳・鳥井裕美子・荒野泰典  
武光誠「古代太政官制の研究」  
〈主査〉佐藤信 〈副査〉村井章介・月本雅幸・石上英一・加藤友康  
榎本淳一「唐王朝と古代日本」  
〈主査〉大津透 〈副査〉佐藤信・藤原克巳・石上英一・氣賀澤保規  
高橋典幸「鎌倉幕府軍制と御家人制」  
〈主査〉村井章介 〈副査〉大津透・六反田豊・近藤成一・五味文彦  
山本信吉「撰関政治史論考」  
〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・藤原克巳・加藤友康・五味文彦  
中村順昭「律令官人制と地域社会」  
〈主査〉佐藤信 〈副査〉大津透・多田一臣・早乙女雅博・加藤友康  
杉森哲也「近世京都の都市と社会」  
〈主査〉吉田伸之 〈副査〉桜井英治・西坂康・横田冬彦・伊藤毅

2009年度

(甲)

若月剛史「政党内閣の成立と崩壊——官僚制の構造変容とその影響——」

〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉藤田覺・鈴木淳・村松岐夫・季武嘉也  
申美那「中世文人貴族の家と職——名家日野家を中心として——」

〈主査〉村井章介 〈副査〉藤田覺・佐藤信・野島(加藤)陽子・本郷恵子  
木下聡「中世武家官位の研究」

〈主査〉村井章介 〈副査〉藤田覺・桜井英治・鴨川達夫・池享  
遠藤珠紀「中世前期朝廷社会における官司制度と政務運営構造」

〈主査〉村井章介 〈副査〉佐藤信・本郷恵子・五味文彦・井原今朝男  
村和明「近世朝廷の成立と展開」

〈主査〉藤田覺 〈副査〉吉田伸之・大津透・山口和夫・田中暁龍

満菌勇「小売革新にみる大衆消費社会の形成過程——戦前期日本の通信販売と月賦販売——」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島(加藤)陽子・吉田伸之・谷本雅之・粕谷誠

(乙)

木村直樹「幕藩制国家と東アジア世界」

〈主査〉藤田覺 〈副査〉吉田伸之・松井洋子・荒野泰典・真栄平房昭

松澤裕作「明治地方自治体制の起源 近世社会の危機と制度変容」

〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島(加藤)陽子・吉田伸之・奥村弘・渡辺尚志

## 1 1 中国語中国文学

### 1. 研究室活動の概要

中国語中国文学専修課程（「中文研究室」）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学の分離などを経て、1904年漢学科が支那哲学、支那文学に分かれた。途中一時期支那哲学支那文学科として合併された時期はあるものの、哲学科、文学科が独立の学科となった時点から数えても、今日まで100年を越す歴史をもっている。

研究領域は、中国語学、中国古典文学、中国近現代文学の三分野に大別される。文学研究の対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビ・ドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語作品が研究の対象である。現在の教員数は、教授3名、准教授2名（うち外国人教員1名）、助教1名であるが、大学院人文社会系研究科中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所、教養学部の教員5名が教育に参加している。学生数は、学部学生3名、大学院修士課程10名、博士課程22名、研究生7名で多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陸からの留学生11名、台湾からの留学生8名、合計19名にのぼっている。留学生の増加は、授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。

国際交流は極めて盛んで、この20数年来、専任の外国人教員として北京大学・復旦大学などから一流の学者を迎え、中国語のみによる授業が行われている。日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出張し、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事

している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。

また、海外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催することも少なくない。最近の主要な催しに国際シンポ「東アジアと村上春樹」（2008年11月1日、東大山上会館大会議室）、国際ワークショップ「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」ワークショップ」（2009年12月3-4日、東大赤門総合研究棟）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、留学生を交えた共同研究の報告や、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2009年度第12号をUT Repositoryで公開している（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#12-0>）。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 当該期間の在職者

戸倉英美教授（中国古典詩、中国古典小説、中国古典文学理論）  
藤井省三教授（中国近代文学、台湾・香港文学、日中比較文学）  
木村英樹教授（現代中国語文法論）  
大西克也准教授（古代中国語文法、文字学）  
李簡准教授（2007年10月～2009年9月。中国古典戯曲、北京大学）  
常森准教授（2009年10月～2010年9月。中国古典文学、北京大学）  
大村和人助教（2006年4月～2009年3月。高崎経済大学専任講師として転出）  
大野公賀助教（2009年4月～2010年9月。東大東洋文化研究所准教授として転出）

### (2) 当該期間の助教の活動

大村和人

在職期間：2006年4月～2009年3月

研究領域：中国古典文学

当該期間の主要業績：博士論文「梁代『艷詩』の再検討——楽府『相逢行』『長安有狭斜行』『三婦艶』に基づく考察——」

大野公賀

在職期間：2009年4月～2010年9月

研究領域：中国現代文学

当該期間の主要業績：博士論文「中華民国期の豊子愷——新たなる市民倫理としての『生活の芸術』論——」

「豊子愷における自己確立のための模索：浙江省立第一師範から東京留学まで」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要 第12号』、2009年10月）

### (3) 当該期間の外国人教員の活動

李簡（中国・北京大学中文系副教授）

在職期間：2007年10月～2009年9月。

研究領域：中国古典戯曲

当該期間の主要業績：「元明曲学家雑劇分類解説」（『北京大学学報（哲学社会科学版）』、2008年第1期）

当該期間の教育活動：

2007年後期

学部講義「中国戯曲史」（後期2単位）

学部演習「中国語文表現実践」（後期2単位）

大学院講義「学術中国語文実践」（後期2単位）

大学院演習「中国古典戯曲研究」（後期2単位）

2008年

学部講義「中国戯曲史」（通年4単位）

学部演習「中国語文表現実践」（通年4単位）

大学院講義「学術中国語文実践」(通年4単位)

大学院演習「中国古典戯曲研究」(通年4単位)

#### 2009年前期

学部講義「中国戯曲史」(前期2単位)

学部演習「中国語文表現実践」(前期2単位)

大学院講義「学術中国語文実践」(前期2単位)

大学院演習「中国古典戯曲研究」(前期2単位)

常森(中国・北京大学中文系副教授)

在職期間:2009年10月~2011年9月

研究領域:中国古典文学

当該期間の主要業績:「論簡帛《五行》與《詩經》学之關係」(『文学遺産』、2009年第6期)

「《離騷》三論」(『国学研究』第24卷、北京大学出版社、2009年12月)

「“純緑”還是“純縁”:一個《詩經》学的誤讀」(『文献』、2010年第1期)

当該期間の教育活動:

#### 2009年後期

学部講義「先秦諸子研究」(後期2単位)

学部演習「中国語文表現実践」(後期2単位)

大学院講義「学術中国語文実践」(後期2単位)

大学院演習「屈原及其詩歌」(後期2単位)

#### (4) 当該期間に受け入れた内地研究員・外国人研究員

葉蕙:自由契約翻訳者(マレーシア)

研究題目—村上春樹のマレー・シンガポールにおける受容に関する研究

研究期間—2007年6月1日~2008年5月30日

李鵬飛:北京大学中文系副教授(中国)

研究題目—日本文学における中国古典小説の受容と変容—「変身」の主題を中心に—

研究期間—2007年11月11日~2009年11月10日

許金龍:中国社会科学院研究員(中国)

研究題目—大江健三郎研究

研究期間—2007年11月19日~2008年9月17日

Xu, Lanjun(徐蘭君):シンガポール国立大学助理教授(シンガポール)

研究題目—日中比較文学研究

研究期間—2008年7月1日~2008年7月31日

Faye Kleeman:コロラド大学副教授(アメリカ)

研究題目—日台比較文学研究

研究期間—2009年9月1日~2010年7月31日

Wixted, John Timothy:アリゾナ州立大学名誉教授(アメリカ)

研究題目—森鴎外の漢詩と翻訳文学に関する研究

研究期間—2009年2月14日~2009年2月28日

馮曉庭:国立嘉義大学中国文学系副教授(台湾)

研究題目—竹添光鴻『毛詩会箋』の研究

研究期間—2009年8月17日~2009年9月7日

吳真:南海大学中文系専任講師(中国)

研究題目—道教儀礼と明清小説

研究期間—2009年11月30日~2011年11月29日

孫蓉蓉:南京大学中文系教授(中国)

研究題目—日本における中国文学理論研究の方法

研究期間—2010年3月1日~2010年3月15日

俞為民:南京大学中文系教授(中国)

研究題目—日本における中国戯曲研究史

研究期間—2010年3月1日～2010年3月15日  
呉澤順：浙江師範大学人文学院教授（中国）  
研究題目—漢語音転史研究  
研究期間—2006年11月～2008年9月

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「張愛玲文学と民国期のファッション」  
「詩の夢・詞の夢——温庭筠と晩唐緒家との比較による考察——」  
「中国古典文学における女性の侠の形象について——侠女の誕生と変遷——」  
「台湾作家白先勇論——『孽子』を中心に——」

2009年度

「『三国志演義』に見える家族の描写について」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

蓋曉星「日本における中国映画『白毛女』の受容——一九五〇年代から一九七〇年代まで」  
〈指導教員〉藤井省三  
侯蘇寒「テレビドラマから見る中国人の経済観念」  
〈指導教員〉藤井省三

2009年度

明田川聡士「『虚構』の想像／創造～李喬《寒夜三部作》におけるフォークナー作品からの影響を中心に～」  
〈指導教員〉藤井省三  
加藤健太郎「『二二八文学』と台湾意識の変遷——呉濁流『無花果』と李喬『埋冤・1947・埋冤』を中心に——」  
〈指導教員〉藤井省三  
藤田玲「饒舌なトポス——莫言が高密の大地から聞く音と声」  
〈指導教員〉藤井省三  
林卓穎「『三言』所収白話小説とその文言原作との比較——恋愛に関する話を中心に」  
〈指導教員〉戸倉英美

#### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

陳朝輝「魯迅と一九二〇～三〇年代日本文壇思潮——プロレタリア文学受容の系譜と構造を解読する——」  
〈主査〉藤井省三 〈副査〉尾崎文昭・長堀祐造・山口守・安藤宏

2009年度

(甲)

大野公賀「中華民国期の豊子愷——新たなる市民倫理としての『生活の芸術』論——」  
〈主査〉藤井省三 〈副査〉大木康・尾崎文昭・西槇偉・山口守  
大村和人「梁代『艷詩』の再検討——楽府『相逢行』『長安有狭斜行』『三婦艶』に基づく考察——」  
〈主査〉戸倉英美 〈副査〉大上正美・矢嶋美都子・齋藤希史・大西克也  
松浦史子「六朝文学に於ける『山海経』の受容について——郭璞と江淹の場合」  
〈主査〉戸倉英美 〈副査〉大上正美・川原秀城・横手裕・藤井省三  
溝部良恵「唐代初期小説の研究——牛肅『紀聞』と戴孚『廣異記』を中心に」  
〈主査〉戸倉英美 〈副査〉小南一郎・黒田真美子・大木康・尾崎文昭

## 12 東洋史学

### 1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。現在(2010年度)本専修課程の授業を担当するのは、教授2名・准教授3名・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、東アジアコース、南アジア・東南アジア・仏教コース、西アジア・イスラム学コース、の三コースに分かれ、それぞれの「歴史社会」専門分野へと再編されたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として歴史部門の再編がなされた。現在では、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所、総合文化研究科等に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムの編成を行っている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるほか、史学大会においてアジア史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡研究会議、東方学会や東洋文庫のように広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわったり、また個別的には、中国社会文化学会、南アジア学会、日本オリエント学会、日本中東学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係をもちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 教授・准教授・講師

教授 蔀 勇造(西アジア史)(1991年4月～2010年3月)

教授 小松 久男(中央アジア史)(1995年～現在)

教授 水島 司(南アジア史)(1997年10月～現在)

准教授 吉澤 誠一郎(中国近現代史)(2001年4月～現在)

准教授 大稔 哲也(西アジア史)(2007年4月～現在)

#### (2) 助教の活動(2008～2009年度)

助教 志賀美和子

在職期間 2005年4月～2009年3月

専門分野 南アジア史

主要業績

“Re-thinking World War II from a Peripheral Point of View: The Cripps Mission and Indian Leaders' attitudes towards the War” Working Paper, the First International Conference of Asian Association of World Historians. 2009.30p.

助教 渡辺美季

在職期間 2009年4月～2010年3月

専門分野 東アジア史

主要業績

「琉球から見た清朝——明清交替、三藩の乱、そして太平天国の乱——」『別冊 環』16、2009年5月、254-261頁

「琉球侵攻と日明関係」『東洋史研究』68-3、2009年12月、94-127頁

「近世琉球的王権与基督教」『東亜的王権與政治思想—儒学文化研究的回顧與展望—』（復旦大学出版社）2009年7月、181—189頁

“The Border of Japan” for Chinese Arrivals in Nagasaki, Satsuma and Ryukyu. Intercontinenta No. 26: Canton and Nagasaki Compared 1730—1830. (Universiteit Leiden) 2009, P.57—63.

## (2) 外国人教師の活動 (2008年～2009年度)

### (3) 受け入れ研究員 (2008年～2009年度)

尹誠翊 (韓国) 2007年9月～2008年8月

柳静我 (韓国) 2008年6月～2010年3月

蔡龍保 (台湾) 2008年7月～9月

胡成 (中国) 2009年5月～7月

バフティヤール・ババジヤノフ Bakhtiyar Babadjanov (ウズベキスタン) 2009年11月5日～2010年4月30日

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「雑誌『改造』に表れるイスラーム」

「10世紀バグダードの王朝宮廷における失脚のメカニズム——アッバース朝カリフ宮廷及びブワイフ朝宮廷における事例の分析——」

「清朝道光年間の塩政改革——湖北省の四川隣接地域の事例」

「中華民国南京政府時期における刑法改正論議」

「ガスプリンスキーの『露東協約』考」

2009年度

「社会主義体制下における経済的インセンティブ——1950年代中国企業の賃金制度——」

「前漢の身分制について——出土史料による再検討——」

「東西を繋いだ薔薇、その文化史」

「7世紀から14世紀のマシュリクにおける履物——服装規制とイスラーム——」

「鎮江府における農田水利——南宋～明にいたる時代を中心に——」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(東アジア歴史社会)

照内崇仁「魏晋南北朝期の士人・学問と地域」

〈指導教員〉平勢隆郎

海老根量介「戦国『日書』に反映された地域性と階層性——九店楚簡『日書』・放馬灘秦簡『日書』の比較を通して——」

〈指導教員〉平勢隆郎

(南・東南アジア歴史社会)

神谷茂子「マラヤ華人世界におけるリーダーの台頭と挫折——陳嘉庚ネットワークの台頭と解体の過程——」

〈指導教員〉古田元夫

2009年度

(東アジア歴史社会)

上出徳太郎「19世紀後半イリ、タルバガタイ地方における露清国境管理」

〈指導教員〉吉澤誠一郎

(西アジア歴史社会)

片倉鎮郎「インド洋の「商人王」とその「臣民」たち——19世紀初葉におけるブー・サイド朝と



- イギリス東インド会社政府との交渉を事例として」  
 〈指導教員〉 蔀勇造  
 芹川梓「守護聖者概念の生成と発展 18～20 世紀テトゥアンのシーディー・サイディーを例に」  
 〈指導教員〉 大稔哲也  
 守田まどか「イスタンブルにおける「街区共同体」の成立——16 世紀の『ワクフ調査台帳』に見られるイマームへの寄道の数量的検討を通して」  
 〈指導教員〉 鈴木董

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

(東アジア歴史社会)

柳静我「清朝の対チベット政策——雍正時期を中心に——」

〈主査〉 吉澤誠一郎 〈副査〉 小松久男・黒田明伸・岸本美緒・濱裕美子

呉玲青「清代中葉台湾における米と銀——「台運」と「台餉」を中心として」

〈主査〉 黒田明伸 〈副査〉 六反田豊・吉澤誠一郎・並木頼寿・岸本美緒

(西アジア歴史社会)

河原弥生「コーカンド・ハーン国におけるマフドゥームザーダ」

〈主査〉 小松久男 〈副査〉 羽田正・森本一夫・濱田正美・新免康

野田仁「カザフ＝ハン国と露清帝国」

〈主査〉 小松久男 〈副査〉 石井規衛・吉澤誠一郎・新免康・宇山智彦

(乙)

(東アジア歴史社会)

青木敦「宋朝と江南社会」

〈主査〉 吉澤誠一郎 〈副査〉 小島毅・黒田明伸・高見澤磨・岸本美緒

2009 年度

(甲)

(東アジア歴史社会)

相原佳之「清代中国における森林政策史の研究」

〈主査〉 黒田明伸 〈副査〉 吉澤誠一郎・高見澤磨・岸本美緒・クリスチャン・ダニエルス

(西アジア歴史社会)

森山央朗「ハディース学文献としての地方史人名録——10-13 世紀の編纂流行とその背景——」

〈主査〉 森本一夫 〈副査〉 大稔哲也・高山博・三浦徹・柳橋博之

橋爪烈「ブワイフ朝の政権構造 支配一族の紐帯とダイラム」

〈主査〉 小松久男 〈副査〉 大稔哲也・森本一夫・佐藤次高・清水和裕

## 1 3 中国思想文化学

### 1. 研究室の活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治 10 年の本学の創立時にまでさかのぼることがで

きる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と2度の名称変更を経て現在に至っている。講座については、平成6年の文学部制度改革にもなっており、教授3名、助教授（平成19年度より准教授）2名、助手（平成19年度より助教）1名の定員から構成される「中国思想文化学」大講座となった。平成7年に大学院が部局化されると、「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野に移行した。平成21年からは、「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成21年度の教員は、教授1名、准教授2名、助教1名であり、他に非常勤講師を4名委嘱した。大学院は、基幹講座としての文学部の本大講座と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア部門の思想・宗教分野とからなり、他に教養学部などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成4年度より毎年2名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助手1名体制にともない、平成8年度からは嘱託1名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、平成21年度後期の時点では、東アジアを中心に5名（博士課程4名、修士課程1名）が在籍、チューター制度うまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。平成21年度後期の時点では、中華人民共和国へ1名が留学中である。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選抜される事例も多い。大学院在籍中に博士論文を提出する者が、近年は毎年2～3名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会科学学会があり、中国語中国文学・東洋史学・教養学部などの教員とともに役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和48年～）が組織されて月例会を開いてきたが、平成2年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。平成12年以降では四庫全書や古今図書集成他のCD-ROMやDVDを購入して活用している。その後も各種媒体の導入やコンピュータネットワークの構築等を通じて、中国学電脳化の環境整備を進めている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

佐藤慎一 教授 専門分野 近代中国思想史

※2008年3月退職、2009年4月より理事・副学長、及び次世代人文学開発センター特任教授。

川原秀城 教授 専門分野 東アジア思想史・中国朝鮮科学史

小島 毅 准教授 専門分野 儒教史・東アジア王権論

横手 裕 准教授 専門分野 道教史・中国三教交渉史

### (2) 2008～2009年度の助教の活動

水口拓寿 助教 専門分野 東アジア思想史・人類学

在職期間 2007年4月～現在

主要業績

(論文)

「風水思想と儒教知識人：言説史の観点から」、人文社会系研究科博士学位申請論文(甲)、2009年3月提出

「中華文化の復興」としての孔子廟改革：1968-70年の台北孔子廟を焦点として」、中島隆博編『中国伝統文化が現代中国で果たす役割』所収、東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」刊、2008年12月

「人体に擬えて大地を読み解く：『発微論』に見る風水思想の地理認識」、『アジア遊学』110号、勉誠出版刊、2008年6月

「論中華文化復興運動時期的「祭孔禮樂之改進」」、『「世界的孔子：孔廟與祀典」国際學術研討會論文集』所収、台北市政府ほか刊、2010年3月

(口頭発表)

「墓のうらに廻れば：2つの風水文献が語る祖先と子孫の「共生」関係」、明治大学古代学  
研究所公開シンポジウム「風水思想と墓地：東アジアの陰宅風水」、2008年12月

### (3) 2008～2009年度の外国人教師の活動

該当者なし

### (4) 2008～2009年度に受け入れた内地研究員・外国人研究員

該当者なし

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「五四運動期における「新しき村」の創造」  
「明末仏教の一考察——智旭の現前一念思想について」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

高田佳代子「イエズス会后期における中国理解について——『大学』と『易経』を中心に——」  
〈指導教員〉川原秀城  
中村惇二「宋遼外交交渉——中華世界秩序原理的観点からの考察——」  
〈指導教員〉小島毅  
平澤歩「修母致子説について」  
〈指導教員〉丘山新  
宮武環「「抱朴子」内篇卷と「本草経集注」にみる煉丹意識——葛洪と陶弘景の連繫——」  
〈指導教員〉川原秀城

2009年度

小早川定幸「六朝時代における家訓の研究」  
〈指導教員〉丘山新  
中村知子「王念孫の説文学」  
〈指導教員〉齋藤希史  
矢野研介「上海博物館蔵戦国楚竹書『三徳』の研究」  
〈指導教員〉丘山新

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

元勇準「『周易』の儒教經典化研究——出土資料『周易』を中心に——」  
〈主査〉川原秀城 〈副査〉大西克也・林克・近藤浩之・長谷部英一  
宮川敬之「和辻哲郎と表現の問題」  
〈主査〉佐藤慎一 〈副査〉菅野覚明・熊野純彦・中島隆博・佐藤(頼住)光子  
廣瀬薫雄「戦国秦漢時代の法と訴訟の研究——新しい中国古代法制史構築の試み——」  
〈主査〉小島毅 〈副査〉佐藤慎一・大西克也・池田知久・初山明

(乙)

小川隆「語録の思想史——中國禪宗文獻の研究——」  
〈主査〉川原秀城 〈副査〉末木文美士・横手裕・大西克也・丘山新

2009年度

(甲)

水口拓寿「風水思想と儒教知識人：言説史の観点から」  
〈主査〉川原秀城 〈副査〉小島毅・横手裕・三浦國雄・渡邊欣雄

## 1 4 インド語インド文学

### 1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では3千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アーリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8年（1996）度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられ、これにより、専門的なドラヴィタ系語学文学の研究に携ることが可能となった。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 教授

土田龍太郎（サンスクリット文学）

高橋孝信（タミル語学文学）

非常勤：矢島道彦、茂木秀淳、沼田一郎

#### (2) 助教

（なし）

#### (3) 外国人教師

（なし）

#### (4) 内地研究員・外国人研究員

（なし）

### 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文

(なし。「特別演習」を履修)

### (2) 修士論文

2008年度

(なし)

2009年度

金玟徳 「Siva 崇拝における Linkodbhava 物語—その役割と意味—」

(指導教員) 永ノ尾信悟

### (3) 博士論文

(なし)

## 15 インド哲学仏教学

### 1. 研究室の活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。以来、現インド語インド文学専修課程と密接な関係を保ちつつ、現在に至っている。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて発生・展開し、またアジア諸地域に伝播してそれぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2009年度現在、教員は教授3名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野（南アジア・東南アジア・仏教コース）に対応し、その一部を構成する。ここでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門などと連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年5名前後であり、学士入学者も1~2名ほどある。学部卒業生の多くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学する。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくるものも稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としているから、結果的には、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通である。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に数回研究例会を開催している。ここでは、大学院の博士課程在学学生などによる研究発表、国際会議等で海外に出張した教員による帰朝報告、海外留学者の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、原則として年に1回、『インド哲学仏教学研究』が刊行され、好評を得ている。

本専修課程が関わるインド学・仏教学は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者

間の国際交流は極めて活発である。また、多くの留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の所学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立以来関係が深く、2007年度まで本研究室にその事務局をおいていた。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 在職者一覧

教授	末木 文美士	専門分野	日本仏教	在職期間	1986年4月より2009年3月まで
教授	斉藤 明	専門分野	インド仏教	在職期間	2000年4月より現在に至る
教授	丸井 浩	専門分野	インド哲学	在職期間	1992年4月より現在に至る
教授	下田 正弘	専門分野	インド仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る
助教	種村 隆元	専門分野	インド仏教	在職期間	2005年4月より2009年3月まで

### (2) 2006～2007年度の助教の活動

#### a. 学術論文

Ryugen Tanemura. "Justification for and Classification of the Post-initiatory Carya in Later Indian Tantric Buddhism." *International Journal of South Asian Studies* 1, 2008, pp.53-75.

Ryugen Tanemura. "Superiority of Vajrayana — Part II: Superiority of the Tantric Practice Taught in the \*Vajrayanantadvayanirakarana (rDo rje theg pa'i mtha' gnyis sel ba)." *Genesis and Development of Tantrism*.

Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo, 2009, pp.487-514.

種村隆元. 「Samvarodayatantra 第21章 Caryanirdesapatala に関する一考察: Padminii 第21章校訂テキスト並びに註」『密教学研究』41, 2009年3月, pp.23-39.

#### b. 研究活動

「インド密教における carya の文献学的研究」科学研究費補助金 2008年度 基盤研究(C) 課題番号 18520040

#### c. 国際学会における発表

なし

#### d. 学外活動 (他大学講師)

2008年度 東京農業大学農学部

2008年度 武蔵野大学通信教育部

### (3) 2008～2009年度に受け入れた内地研究員・外国人研究員

2008年度: Mark Blum

2009年度: Mark Blum

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「死生学と仏教に関する考察」

「明治近代仏教学形成——村上专精の仏教観、仏教史観、そして大乘非仏説論争を中心に——」

2009年度

「火の鳥(鳳凰編)にみる、「悪」の仏性——そして現代」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

青木佳伶 「『首楞嚴経』の思想史的研究——長水子璿の『首楞嚴義疏注経』を通じて——」

(指導教員) 末木文美士

中西俊英 「如来蔵解釈からみた中国華嚴の思想史的研究——法蔵および慧苑を中心として——」

(指導教員) 末木文美士

近藤隼人「『ユクティディーピカー』における知覚論の特質」

〈指導教員〉丸井浩

宋燕「安世高訳『一切流攝守因經』の研究」

〈指導教員〉下田正弘

2009年度

得能公明「中観派の涅槃観——『中論』第25章涅槃の考察章（観涅槃品）を中心として」

〈指導教員〉斎藤明

友成有紀「文法学の意義を巡る議論——『ニヤーヤマンジャリー』第六日課所収の議論を中心に——」

〈指導教員〉丸井浩

森山慧「古典サーンキヤ思想が説く輪廻から解脱への道——『マータラ註』における理解——」

〈指導教員〉丸井浩

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

鈴木健太「ハリバドラの『八千頌般若経』解釈方法——『八千頌般若経』第二章註釈部分を中心として——」

〈主査〉下田正弘 〈副査〉斎藤明・丸井浩・渡辺章悟・兵藤一夫

高柳さつき「日本中世禅思想研究——聖一派を中心に」

〈主査〉末木文美士 〈副査〉下田正弘・丘山新・石井修道・中尾良信

吉川太一郎「遼代仏教思想の研究」

〈主査〉末木文美士 〈副査〉斎藤明・横手裕・丘山新・木村清孝

(乙)

田中公明「インドにおける曼荼羅の成立と発展」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉末木文美士・下田正弘・永ノ尾信悟・頼富本宏

2009年度

(甲)

張欣 ZHANG Xin「元代浄土教の研究——『蓮宗宝鑑』を中心として——」

〈主査〉丘山新 〈副査〉下田正弘・横手裕・末木文美士・西本照真

## 16 イスラム学

### 1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。2010年現在の教員数は、教授2名、助教1名。それぞれ近代より前の古典期イスラム思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、シーア派思想研究、現代アラブ政治、近現

代イラン研究、アラビア語の領域に関して非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属する西アジア歴史社会専門分野と連携しつつ、さらには東洋文化研究所ならびに駒場大学院総合文化研究科の教員3名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2～3名前後で、現在の在籍数は9名である。他大学から学士入学してくるものも過去の例では多かった。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。また近年、イランやパキスタンなどからの研究生を受け入れ、より広い範囲での教育活動を目指している。

本専修課程から大学院人文社会系研究科イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学から2名ほどが入学する。現在、大学院生は11名在籍している。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室では、イスラム思想文化研究会を運営している。この研究会では、月例会を開催しており、研究室在籍者による発表や、学外から研究者を招いての講演を行っている。

## 2. 構成員（専任教員）・専門分野

### (1) 当該年度在職者

教授 竹下政孝 専門分野 イスラーム神秘主義

教授 柳橋博之（2009年3月まで准教授） 専門分野 イスラーム法

助教 青柳 かおる（2009年12月まで） 専門分野 イスラーム思想史

### (2) 2008～2009年度の助教の活動

論文 「ガザリー」の「婚姻作法の書」にみられる妻の条件 『駒澤大学佛教学部論集』第40号, 2009年11月

発表 「アラビア語概論」早稲田大学理工学術院「入門外国語案内」招聘講師, 於早稲田大学, 2009年7月15日

「イスラームの婚姻論——ガザリー、イブン・アラビー、カラダーウィー」第5回イスラーム・レクチャー, 於東洋哲学研究所, 2009年10月30日

### (3) 2008～2009年度受け入れ外国人研究員

なし

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「11世紀のホラーサーンにおけるスーフィズムの実相——クシャイリーを中心に——」

2009年度

「イスラムとダーウィニズム」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

中西悠喜「<存在>と神——ファナーリー研究序説——」

（指導教員）竹下政孝

2009年度

宋暎恩「ジャーミー（Jami）の存在一性論と中国の受容——『閃光の輝き（Ashi' at al-Lama'at）』を中心として——」

（指導教員）竹下政孝

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2009年度



(甲)

飯山陽「イスラームにおける「法の目的」 マスラハ概念の理論と実践」  
〈主査〉柳橋博之 〈副査〉竹下政孝・鎌田繁・橋場弦・松原健太郎

## 17 西洋古典学

### 1. 研究室（専修課程）の活動等の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語でしるされた文献全体を対象とする。のみならず古典古代世界の全容の把握をもめざす学問である。欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問であるが、本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は2人とあまりに少ないものの、非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語／ラテン語・韻文／散文いずれをもおえるように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。

研究室紀要（査読つき）を年1回発刊している。2008年7月に第4号、2009年8月に第5号を刊行した。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1)

逸身 喜一郎 ギリシャ語韻文・ラテン語韻文

（教授）1997年度～2009年度

片山 英男 古典文献学史・古典修辞学

（助手）1977年度～1983年度 （助教授）1983年度～1993年度 （教授）1993年度～

#### (2) 2008～2009年度の助教の活動

小池 登

在職期間 2008年度～

研究領域 ギリシャ語韻文

主要業績 （共編）大芝芳弘・小池登編『西洋古典学の明日へ』、知泉書館、2010年3月  
非常勤講師引き受け状況 共立女子大学（2004年度～）、日本女子大学（2009年度後期）

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「古典古代牧歌詩の伝統と反復表現」

「プラトン『饗宴』におけるアリストファネスの演説」

「ホラティウス『風刺詩』第1巻の構造と内容」

2009年度

「オウィディウスの『イビス』について——敵の描き方における伝統的手法に関する考察」

「メレアグロス A.P.4.1 の解釈」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

なし

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

小池登「ピンドロス祝勝歌研究——4つの考察」

(主査) 逸身喜一郎 (副査) 片山英男・安西眞・西村太良・橋場弦

# 18 フランス語フランス文学

## 1. 研究室活動概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、ひとり詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張にともなって、映画のシナリオや時事雑誌の記事など、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

塩川徹也教授が2009年3月に停年退職したあと、研究室の専任スタッフは、教授2名、准教授2名、外国人教師(准教授)1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実際的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2009年度の大学院学生数は、修士課程14名、博士課程38名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格(Master II)を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。その一方、本研究科で課程博士論文を提出する学生も増加し、毎年2、3名が博士号を取得している。また専門的知識を生かし、修士課程修了後に新聞社、出版社等に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年10名程度。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、ティーチング・アシスタントの協力を得たヒアリング訓練の授業を設け、また他専修課程・他学部の学生に対しては「原典を読む」の枠内で講読授業を提供している。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院3コマ(「アカデミック・ライティング」を含む)、学部3コマが用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、塩川徹也教授が日本フランス語フランス文学学会会長(2005年～09年)を勤め、日本におけるフランス文学研究の推進に貢献しているほか、スタッフも各種の関連学会・研究会の組織・運営に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリとリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール(高等師範学校)およびジュネーヴ大学との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。ジュネーヴ大学とは2009年度より毎年1名の学部生交換も始まった。研究者の交流も盛んで、下記の受入れ外国

人研究員の欄に掲げる各国の研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。2009年11月には、2008年ノーベル文学賞受賞作家ル・クレジオ氏を迎えて対談形式の講演会を開催した。これらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 2008～2009年度

- 教授 塩川徹也（パスカル、フランス古典主義文学）〔2009年3月停年退職〕  
月村辰雄（フランス中世文学）  
中地義和（ランボー、フランス近代詩）  
准教授 塚本昌則（ヴァレリー、フランス20世紀文学）  
野崎 敏（ネルヴァル、フランス19世紀文学）

### (2) 助教の活動

畑 浩一郎（ハタ コウイチロウ）1970年6月10日生

略 歴 1994年3月 東京大学文学部フランス語フランス文学専修課程卒業

1994年4月 同 大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）

1996年3月 同 大学院人文社会系研究科修了

1996年4月 同 大学院人文社会系研究科博士課程進学（仏語仏文学）

2002年3月 同 単位取得満期退学

この間、1997年10月より1年間、大学間交流協定交換生としてパリ・エコール・ノルマル・シュペリウールに留学、パリ第3大学にてDEA（博士論文提出資格）を取得（98年9月）。

2002年10月～2004年9月フランス政府給費留学生としてパリ第4大学博士課程在籍。

2005年5月 パリ第4大学にて博士学位取得（文学博士）

2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教

研究対象 19世紀フランス文学、特にロマン主義時代のオリエン特旅行記

主要業績（著書） *Voyageurs romantiques en Orient – étude sur la perception de l'autre*, L'Harmattan, coll. « Critiques Littéraires », 2008 [2009年度「地中海学会ヘレンド賞」受賞]

（論文）「自分を語る旅行者 シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』、『仏語仏文学研究』、2009年、第39号、pp. 25-44

「ゼトネビーとゼイナブ——女主人公の名前をめぐる」、『ネルヴァル手帖』、2008年12月、第5号、pp. 123-143

（学会発表）「他者との邂逅——フランス・ロマン主義時代のオリエン特旅行記をめぐる」、地中海学会定例研究会、2008年12月13日、東京大学本郷キャンパス

非常勤講師 2006年4月～ 東洋大学

2006年4月～ 東京女子大学

### (3) 外国人教師（准教授）の活動

マリアンヌ・シモン＝及川（Marianne SIMON-OIKAWA）

略歴

1989年9月 国立高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）およびパリ第七大学入学

1990年9月 同大学にて仏文（現代文学）学士号、英文学士号取得

1991年9月 同大学にて修士号取得（現代文学）

1992年7月 大学教育教授資格（アグレガシオン）取得

1993年9月 パリ第七大学にてDEA (PhD)取得（現代文学）

1993年9月～1995年8月 東京大学研究生

1995年9月～1998年9月 リール大学講師（現代文学）

1996年9月 パリ第七大学にて日本語学士号取得

- 1997年9月 同大学にて日本語修士号取得  
 1999年12月 パリ大七大学にて文学博士号取得(現代文学)  
 1999年4月-2005年4月 早稲田大学非常勤講師(フランス文学)  
 2000年9月-2005年9月 慶應義塾大学訪問講師(フランス文学)  
 2000年4月-2008年8月 日仏会館客員研究員  
 2006年10月 東京大学准教授
- 研究対象 フランス文学と絵画;日仏両文化における視覚詩の伝統  
 主要業績(2008年度、2009年度分のみ)
- (著書) - (avec Annie Renonciat) Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009.  
 - マリアンヌ・シモン＝及川(他3名), 『日本の文字文化を探る一日仏の視点から』、勉誠出版、2010年2月。
- (論文) - « La poésie idéographique de Pierre Albert-Birot », *RiLUne*, n° 8, pp. 145-164, en ligne sur : [http://www.rilune.org/ENGLISH/mono8/13\\_Simon-Oikawa.pdf](http://www.rilune.org/ENGLISH/mono8/13_Simon-Oikawa.pdf)  
 - « Le temps codé : les calendriers en images (*egoyomi*) au Japon », *Extrême-Orient Extrême-Occident*, n° 30 (« Du bon usage des images : autour des codes visuels en Chine et au Japon », sous la direction de Claire-Akiko Brisset), 2008, p. 117-142.  
 - « Le Roman d'un regard : Bernard Noël dans l'atelier de Michel Mousseau », *Traversée*, Calliopées, 2009, pp. 221-230.  
 - « Du divertissement à l'enseignement : les usages pédagogiques des images en écriture (*moji-e*) au Japon, dans Annie Renonciat et Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009, pp. 39-53.  
 - « La coquille aux mirages », *Le Frisson esthétique*, n° 7, janvier 2009, pp. 32-33.  
 - « L'arbre aux feuilles d'or », *Le Frisson esthétique*, n° 8, automne-hiver 2009-2010, pp. 52-54.  
 - 「葛飾北斎と文字絵の世界」、『日本の文字文化を探る——一日仏の視点から』、勉誠出版、2010年、pp. 329-352。  
 - 「『日本の文字文化を探る』の出版にあたって」、勉誠通信、18号、2010年、pp. 13-15。
- (書評) - (en collaboration avec Pascal Griot) : ouvrage d'Annick Horiuchi (dir.), *L'Éducation en Chine et au Japon*, Les Indes savantes / Université Paris 7 – Diderot GreJa, coll. « Etudes japonaises », compte rendu dans *Cipango*, n° 15, 2008, pp. 258-262.  
 - ouvrage d'Anne Kerlan-Stephens et Cécile Sakai (dir.), *Du visible au lisible. Texte et image en Chine et au Japon*, compte rendu en ligne sur le site Internet [fabula.org](http://fabula.org).  
 - ouvrage de Claude Debon : *Calligrammes » dans tous ses états*, *Édition critique de Guillaume Apollinaire*, Éditions Calliopées, 2009, compte rendu dans *Apollinaire*, n° 5, 2009.
- (翻訳) - Iwamoto Kenji, « Lanterne magique et pédagogie dans le Japon de Meiji : thèmes, images, discours », dans Annie Renonciat et Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009, pp. 128-141.
- (学会発表) - « Pouvoir de l'image, puissance de l'écriture : formes d'efficacité du sacré en Extrême-Orient » (en collaboration avec Claire-Akiko Brisset, Université Paris 7, GreJa et CEEI), atelier organisé lors du 8<sup>e</sup> congrès international du IAWIS (Association internationale pour l'étude des rapports entre texte et image) portant sur le thème de l'« Efficacité », section « Actions rituelles », Institut national d'histoire de l'art, 7-11 juillet 2008.  
 - « Voir la poésie - La poésie visuelle en France et au Japon », Bibliothèque de Saint-Aubin-sur-mer, Calvados, 6 août 2009.

#### (4) 2008~2009年度受入れ外国人研究者・講演者

2008年度

Jean Echenoz (作家)

Silvio Yeschua (テル・アビブ大学)

Pierre Bayard (パリ第8大学)

Frédéric Tinguely (ジュネーヴ大学)  
Sophie Basch (パリ第4〔ソルボンヌ〕大学)  
Nathalie Mauriac Dyer (フランス国立科学研究所)  
Anne-Marie Christin (パリ第7大学)  
Jean-Philippe Toussaint (作家)  
Arlette Albert-Birot (パリ・エコール・ノルマル・シューペリール)  
Jean-Michel Frodon (映画批評家、*Cahiers du cinéma* 誌編集長)  
陳儒修 (台湾・国立政治大学)

2009年度

Antoine Compagnon (コレージュ・ド・フランス)  
Steve Murphy (レンヌ第2大学)  
William Marx (パリ第10大学)  
John Edwin Jackson (ベルン大学、スイス)  
Jean-Marie Le Clézio (作家、2008年度ノーベル文学賞受賞者)  
Yves Peyré (国立サント・ジュヌヴィエーヴ図書館長)

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「『カリギュラ』論」  
「アルチュール・ランボー『地獄の一季節』研究」  
「ゾラ『獣人』研究——鉄道小説としての『獣人』——」  
「前期カミュ作品における不条理の研究」  
「モンテスキュー『法の精神』における民法の考案、及びフランス民法の変遷」  
「アルベール・カミュの『転落』における無垢と裁きについて」  
「フロベール『ボヴァリー夫人』論——小説論と女性論の狭間で——」  
「アナトール・フランス『シルヴェストル・ボナールの罪』における〈私〉の問題」  
「ジャック・レダ『パリの廃墟』における「私」の問題」  
「ディドロ『ラモーの甥』研究」  
「アルベール・カミュ『シーシュポスの神話』における人間論」

2009年度

「ジャン・コクトーと『恐るべき子供たち』」  
「アルフレッド＝ジャリ『超男性』論」  
「バルザック『あら皮』研究」  
「モリエールの喜劇について」  
「ジャン・ジュネの初期小説をめぐって」  
「マルグリット・デュラス研究『愛人』——私を描くということ」  
「狂気の漸近線——アルチュール・ランボー『地獄の一季節』読解の試み」  
「ボードレール研究」  
「20世紀フランス詩研究」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

坂爪彬「『ジェルミナル』における暴力」  
(指導教員) 月村辰雄  
谷川雅子「ピエール・ニコルにおける真とその影——美学から人間学へ——」  
(指導教員) 塩川徹也  
中山琢己「サルトル演劇研究——『アルトナの引きこもりたち』を読み直す」  
(指導教員) 塚本昌則

2009 年度

小野真紀子「アラン=フルニエ研究」

〈指導教員〉月村辰雄

田中未来「アンドレイ・マキース論——世界を救うための小説——」

〈指導教員〉塚本昌則

上杉誠「『カストロの尼』論：16 世紀イタリアの「情熱恋愛」」

〈指導教員〉野崎敏

加藤万梨耶「ユゴー『レ・ミゼラブル』研究」

〈指導教員〉中地義和

### (3) 博士論文執筆者題目一覧

2008 年度

(甲)

片岡大右「隠遁者、野生人、蛮人シャトーブリアンにおける宗教と文明」

〈主査〉塩川徹也 〈副査〉中地義和・塚本昌則・野崎敏・大浦康介

辻部（藤川）亮子「フランス中世抒情詩の位相と構造」

〈主査〉月村辰雄 〈副査〉塩川徹也・中地義和・浦一章・瀬戸直彦

## 19 南欧語南欧文学

### 1. 研究室活動の概要

本専修課程は 1979 年 4 月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994 年 4 月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も 1995 年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する専任教員はいないが、94 年度から学外非常勤講師によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業（学部・大学院共通）も年度により開講されている。また、2001 年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2008～2009 年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように 4 名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994 年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 構成員・専門分野

教授：長神 悟（イタリア語史・ロマンス語学）

准教授：浦 一章（イタリア 13・14 世紀文学）

外国人教師：Luigi Cerantola（レイジ・チェラントラ）（イタリア語韻律学）

助教：長野 徹（イタリア近現代文学・イタリア児童文学）

### (2) 助教の活動

長野 徹

在職期間 1997 年 10 月～現在

研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学

主要業績（2008～2009 年度）

（論文）「ルイーダ・バルツィーニ『フィアンミフェリーノの冒険』と日本」（『日伊文化研究』第 48 号、2010 年 3 月、84-94 頁）

### (3) 外国人教師

Luigi Cerantola（レイジ・チェラントラ）

研究領域 イタリア文学（とくに韻文）、韻律学

在職期間 2002 年 4 月～現在

主要業績（2008～2009 年）

著書 *I passeri di Svevo*, De Bastiani, 2008

*Planctus*, De Bastiani, 2008

*Arie Italiote*, Aracne, 2008

*LX*, De Bastiani, 2009

*Tre Arie cristologiche*, Matteo, 2009

### (4) 2008～2009 年度に受け入れた外国人研究員等

2008 年度

外国人研究員 5 名

2009 年度

外国人研究員 4 名

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008 年度

「オルペウス物語の変遷～モンテヴェルディのオペラ「オルフェーオ」を中心にして」

「閉じられた作品（opera chiusa）としての“薔薇の名前”」

「古イタリア語の冠詞について」

2009 年度

「ダンテ『神曲 地獄篇』における語りの構造」

「『デカメロン』における変意接尾辞について」

「ダンテ『神曲』（天国篇）と『聖書』（新約聖書のヨハネ黙示録）との関係について」

「マキアヴェッリ『マンドラーゴラ』研究」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

小林沙矢佳「文学者としてのロレンツォ・デ・メディチ研究——「シンポジオ」における模倣と独創」  
〈指導教員〉長神悟

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(乙)

浦一章「工房の秘密を求めて——ダンテへダンテから——」

〈主査〉長神悟 〈副査〉塩川徹也・月村辰雄・高田康成・藤谷道夫

2009 年度

(甲)

山崎彩「イタロ・ズヴェーヴォ研究 先行する諸言説の模倣と転倒」

〈主査〉浦一章 〈副査〉長神悟・野崎歆・村松真理子・白崎容子

## 20 英語英米文学

### 1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品まで幅広い。現在、専任教員は教授4名、准教授2名、外国人客員教授1名、助教1名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした“英語漬け”の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1～2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。



海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を20名以上は排出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもいる。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1)

教授	平石 貴樹	HIRAISHI, Takaki	(アメリカ文学)
教授	高橋 和久	TAKAHASHI, Kazuhisa	(イギリス文学)
教授	今西 典子	IMANISHI, Noriko	(英語学)
教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学)
准教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
准教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
助教	中戸 照恵	NAKATO, Terue	(英語学)

### (2) 助教の活動

中戸照恵

講演・学会発表

“Cross-linguistic Variation of the Inalienable Possession Construction” 東京大学英語学研究会研究発表会 (2008)

「述語の再帰標示に関する通言語的研究」日本英文学会関東支部第3回大会 (2008)

“Reconsidering the Typology of Syntactic Reflexive-Markers and ‘Reflexive-Marking’ Systems” ELSJ 2<sup>nd</sup> International Spring Forum (2009)

「相互表現の獲得について——ミニマリスト・プログラムに基づく考察」日本英語学会第27回大会 (2009)

論文

“On the Cross-linguistic Variation of ‘Reflexive-Marking’: An Interim Report,” *Linguistic Research* 24 (2008)

“Reconsidering Syntactic Reflexive-Markers and ‘Reflexive-Marking’ Systems: from a Typological Point of View,” *Linguistic Research* 25 (2009)

「相互表現の獲得について——ミニマリスト・プログラムに基づく考察」日本英語学会第27回大会研究発表論文集 (2010)

### (3) 外国人教師の活動

Stephen Clark

講演・学会発表

“Two solitudes: Multiculturalism in Atwood” Margaret Atwood Symposium (2008)

“Peri-Performatives in Blake” イギリス・ロマン派学会公開セミナー (2008)

“Sentimental Blake”, British Association of Romantic Studies (2009)

“Romantic Texts as a Resource for Language Teaching” 全国語学教育学会 (2009)

“Guilt and Redemption in late Ondaatje” Canadian Embassy (2009)

編著書

*Asian Crossings: Travel Writing on China, Japan and South-East Asia* (Hong Kong University Press 2008), co-edited with Paul Smethurst

*Liberating Medicine 1725-1850* (Pickering and Chatto 2009), co-edited with Tristanne Connolly

*Teaching Romanticism* (Palgrave Macmillan 2010), edited by David Higgins and Sharon Ruston

(“Teaching Romanticism in Japan” pp. 177-90 を担当。)

その他

review of Hatsuko Niimi, *Blake’s Dialogic Texts* 『イギリス・ロマン派研究』第32号(2008)

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

To Make Us Wondered at in Time to Come: Staging Cruelty in William Shakespeare’s *Titus Andronicus* (後世の人々が私たちを見て驚嘆する: ウィリアム・シェイクスピア『タイタス・アンドロニカス』における残酷性の演出)

The Development of General American and Its Characteristics (標準アメリカ英語の発展とその特徴)  
Gertrude Examined: A Study of Dramatic Possibilities in *Hamlet* (『ハムレット』におけるガートルードの解釈の可能性についての研究)

L2-Acquisition of English Articles by Japanese Speakers (第二言語習得研究(日本語話者による英語の冠詞の習得))

*The Long Goodbye* and Chandler’s Design for Serious Literature (『長いお別れ』とチャンドラーの純文学への試み)

DegP Projection in Japanese: An Analysis of Excessiveness Expressions (日本語における程度詞句投射: 過剰表現の分析)

Life and Death Juxtaposed: Study of *Mrs. Dalloway* (交錯する生と死: 『ダロウェイ夫人』研究)

A Study of Narrative Strategies in Kazuo Ishiguro’s *Never Let Me Go* (カズオ・イシグロ『私を離さないで』における語りの戦略研究)

The Art of Counterpoint in William Faulkner’s *Light in August*: A Comparison of Lena Grove and Other Characters (ウィリアム・フォークナー『八月の光』における対位技法: リーナ・グローヴと他の登場人物との比較)

A Boundary between Reality and Illusion: A Study of Steven Millhauser (現実と幻想の境界—ステューブン・ミルハウザー研究)

Questioning Reality in Alice’s Adventures in Wonderland (『不思議の国のアリス』における現実性を問う)

The Hate for Snobbism in Roald Dahl’s Works (ロアルド・ダール作品に見られる俗物性への嫌悪)

The First-Person Narrative in *The Great Gatsby*: Nick’s Objectivity and Its Collapse (『グレート・ギャツビー』における一人称の語り: ニックの視点の中立性とその崩壊)

The Acquisition of Personal System in German: A Comparison with English and French (ドイツ語の再帰詞類の習得—英語とフランス語の比較による分析)

The Structure of *The Turn of the Screw* (『ねじの回転』の構造)

Monotony and Frame Narrative in *Frankenstein* (複数の語り手がもたらす物語の平板化)

E. M. Forster’s *Howards End* and its relevance to Garden City Movement (『ハウーズ・エンド』に見る田園都市計画の影響)

2009年度

Double Perception in Ezra Pound’s “Portrait d’une Femme” (エズラ・パウンドある婦人の肖像における重認識)

A Study of Simile and Trope in Edgar Allan Poe’s Poetry (エドガー・アラン・ポーの詩における比喩の研究)

Women Characters in *Gone with the Wind* (『風と共に去りぬ』における女性像)

On the Verge of Death: An Analysis of the Late Poems of Sylvia Plath (死に際して—シルヴィア・プラサ後期詩の分析)

Misogyny in Henry James’s *The Turn of the Screw* (ヘンリー・ジェイムズ『ねじの回転』における女性嫌悪)

Analysis of Amount Relative in Japanese (日本語における分量関係節の分析)  
 Repression and Sentimentality in Flint's works (F. S. Flint の詩における抑圧と感傷性について)  
 Gloomy Rebellion in *Brave New World* and *Ninety Eighty-Four*, guided by *The Time Machine*  
 (『タイム・マシーン』を導入とした、『すばらしい新世界』、『1984年』における絶望的反逆)  
 Parting with a Parent: On Rebecca Brown's *Excerpts from a Family Medical Dictionary* and Philip  
 Roth's *Patrimony* (親を看取る レベッカブラウンの『家庭の医学』とフィリップロスの『父の遺産』  
 について)  
 Ambivalent Narrative Closure in *Sense and Sensibility* (『分別と多感』における結末の曖昧さ)  
 A Study of Incoherence in Aphra Behn's *Oroonoko* (アフラ・ベーン『オルノーコ』における矛盾の研  
 究)

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

- 梅原英亮 *Faster Than Meaning, Slower Than Sound: Reading *Light in August** (意味よりも速く、  
音よりも遅く：『八月の光』を読む)  
 (指導教員) 柴田元幸
- 岸まどか “Youse Yo’ Own Daughter”: Zora Neale Hurston and the Disruptive Daughterhood (「お  
まえはおまえの娘」：ゾラ・ニール・ハーストンと分裂する娘性)  
 (指導教員) 平石貴樹
- 河西良太 *Modes of Silence in Virginia Woolf's *To the Lighthouse** (ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』  
における沈黙の諸様式)  
 (指導教員) 阿部公彦
- 桐山大介 *Telling Bodies: Corporeality and Narrative Authority in William Faulkner's *Absalom,  
Absalom!** (語る身体/身体を語る：ウィリアム・フォークナー『アブサロム、アブサロム!』に  
おける身体性と語りの権威)  
 (指導教員) 平石貴樹
- 中嶋英樹 *Forms of Attention in *Ulysees** (『ユリシーズ』における注意の諸形態)  
 (指導教員) 高橋和久
- 蓮池藍 *Gift and Revenge in *Timon of Athens** (『アテネのタイモン』における贈与と復讐)  
 (指導教員) 大橋洋一
- 福島利幸 *Puritanism versus Business in Middleton's *A Chaste Maid in Cheapside*: Fragmented  
Sense of Value and What Survives in the City* (ミドルトン『チープサイドの貞淑な乙女』に見る  
ピューリタニズム対ビジネス：都市の中の分裂した価値観と後に残るもの)  
 (指導教員) 大橋洋一
- 古井義昭 *The World of Dead Letters: Writing and Kinship in Melville's *Pierre** (デッド・レターの  
世界：『ピエール』における書く行為と血縁について)  
 (指導教員) 柴田元幸
- 野村純也 *Locative Arguments with Measure Phrases in Japanese* (日本語の度量句を伴う場所項)  
 (指導教員) 渡辺明
- 渡辺茉莉 *Representations of Old Age in William Shakespeare: *King Lear* and Others* (ウィリア  
ム・シェイクスピアにおける老いの表象——『リア王』を中心に)  
 (指導教員) 大橋洋一

2009年度

- 相木裕史 “Black and White and Metallic against the Sky”: The Cinematic Imagination in *Tender  
Is the Night* (「黒く白く金属的に空に映え」：『夜はやさし』における映画的想像力)  
 (指導教員) 平石貴樹
- 柿原妙子 *Ireland in Motion: A Study of the Self and the Nation in W. B. Yeats's Poetry* (動くア  
イルランド：W. B. Yeats の詩における自己と国家)  
 (指導教員) 阿部公彦
- 菅原彩加 *Syntactic Properties of Split Topicalization in Japanese* (日本語における分離話題化の統

語的性質)

(指導教員) 渡辺明

高畑悠介 "Twixt the Two Centuries: A New Look at Potentiality and Limitations of Conrad's Later Fiction (世紀の狭間で: コンラッド後期作品の潜在的可能性と限界についての再考)

(指導教員) 高橋和久

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2009年度

(甲)

照沼阿貴子 The Acquisition of Negative Sentences Containing a Quantified Noun Phrase:

Relative Scope and Implicatures in Child Grammar (数量詞句を含む否定文の獲得: 子供の文法における相対的作用域と含意について)

(主査) 今西典子 (副査) 渡邊明・伊藤たかね・長谷川欣佑・大津由紀雄

## 2 1 ドイツ語ドイツ文学

### 1. 研究室の活動の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学(歴史文法と現代言語学)の研究・教育をおこなっている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、大学院のドイツ語ドイツ文学専門分野の教育活動として、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキウム(学食)の時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

研究論文誌として年2号発行している『詩・言語』は、2008年度には69号・70号が、2009年度には71号・72号が発行された。

科学研究費補助金に関する研究としては、2009年度から3年間の予定で、研究計画「ドイツ語史における開始相表現の変化」(研究代表者: 重藤実)が日本学術振興会補助金の交付を受け、研究が開始された。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わるのが通例となっている。2008-2009年度には、宮田眞治が機関誌編集委員およびドイツ文化ゼミナール実行委員をつとめた。また同期間、重藤実はドイツ文法理論研究会機関誌編集長、宮田眞治は日本シェリング協会機関誌編集長の任にあった。

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いてて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2008年度

・Gerhard Neumann 教授(ミュンヘン大学): "Chinesische Mauer und Schacht von Babel. — Franz Kafkas Architekturen —" (4月1日)

・Dietmar Goltschnigg 教授(グラーツ大学): "Franz Kafkas verrätzelnder Erzählprozess und seine hermeneutischen "ANFORDERUNGEN"" (9月5日)

・Monika Schmitz-Emans 教授(ボーフム大学): "Jean Paul als Enzyklopädist der Künste. Die Romane "Flügeljahre" und "Der Komet"" (10月14日)

2009年度

・ Hans Dieter Zimmermann 教授 (ベルリン工科大学名誉教授) : "Das Labyrinth der Welt. Zu Kafkas Roman "Der Proceß"" (2010年1月25日)

・ Georg Witte 教授 (ベルリン自由大学) : "Literarische Hunde: Zwischen Cervantes, Hoffmann, Gogol und Kafka" (3月29日)

また大学院の学生の多くがドイツ、オーストリア、スイスへ留学している。

## 2. 構成員

### (1)2008・2009年度の専任教員

教授： 松浦 純 中近世ドイツ語ドイツ文学

教授： 重藤 実 ドイツ語学

准教授： 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

客員教授 (外国人教師) : Christine Ivanović 近現代ドイツ文学

(2008年11月まで客員准教授、12月より客員教授)

### (2)客員教授 (外国人教師) の活動 (2008年度～2009年度)

客員教授 (外国人教師) Christine Ivanović

在職期間 2003年10月1日～

略歴

#### 1) 学歴

1981年6月 フリデリツィアーヌム・ギュムナージウム [中高等学校] (エアランゲン) 卒業  
(=大学入学資格取得)

1981年5月-10月 アメリカ合衆国短期留学 (デューク大学夏期講習参加等)

1981年10月 エアランゲン・ニュルンベルク大学入学

1983年2月-10月 ベオグラード大学 (ユーゴスラヴィア) 留学

1988年2月 エアランゲン・ニュルンベルク大学修士号取得 (ドイツ近現代文学・スラブ文学・哲学)

1989年 「外国人のためのドイツ語」 コース修了

1995年2月 エアランゲン・ニュルンベルク大学博士号取得 (比較文学)

2008年7月 大学教授資格取得 (ドイツ近現代文学・比較文学)

#### 2) 職歴

1988年4月-89年8月 エアランゲン・ニュルンベルク大学ドイツ近現代文学講座副手

1989年9月-90年10月 エアランゲン・ニュルンベルク大学比較文学講座研究員

1989年9月-95年7月 エアランゲン・ニュルンベルク大学非常勤講師兼任 (ドイツ近現代文学および比較文学)

1990年11月-93年6月 ドイツ研究共同体 (DFG) 研究プロジェクト「ツェラーン注解」研究員

1993年11月-94年3月 エアランゲン・ニュルンベルク大学ドイツ近現代文学講座助手代行

1995年8月-99年10月 エアランゲン・ニュルンベルク大学比較文学講座助手

1999年11月-03年9月 エアランゲン・ニュルンベルク大学専任教師 (Akademische Rätin)

2003年10月-07年3月 東京大学大学院人文社会系研究科外国人教師 (客員助教授)

2007年4月-08年11月 同上 (客員准教授)

2008年12月-現在 同上 (客員教授)

#### 3) 賞罰

1981年 ロルフ・ランゲ記念賞 [大学入学資格試験優等賞]

1985-88年 フリードリヒ・ナウマン財団俊秀奨学生

1988-95年 フリードリヒ・ナウマン財団博士論文奨学生

論文

Schmerz als Provokation der Visual culture. Laokoon, Kafka, Weiss. In: Monika Schmitz-Emans, Gudrun Lehnert (Hrsg.): Visual Culture. Beiträge zur XIII. Tagung der Deutschen Gesellschaft für Allgemeine und Vergleichende Literaturwissenschaft. Potsdam 18.-21.Mai 2005. Heidelberg

(Synchron) 2008, S.83-95.

Peinliche Zeiten, im Allgemeinen und im Besonderen. Vorüberlegungen zum „Kulturfaktor Schmerz“. In: Yoshihiko Hirano, Christine Ivanovic (Hrsgg.): Kulturfaktor Schmerz. Würzburg 2008, S.11-28.

Versehrt. Die Sprache des Schmerzes in der Dante-Rezeption nach dem Holocaust. In: Yoshihiko Hirano, Christine Ivanovic (Hrsgg.): Kulturfaktor Schmerz. Würzburg 2008, 65-81.

Kultur als Gestaltung der Differenz. Zur Rezeption des japanischen Ursprungsmythos Izanami und Izanagi in deutschsprachigen Texten des 20. Jahrhunderts. In: Akten des XI. Internationalen Germanistenkongresses Paris 2005: „Germanistik im Konflikt der Kulturen“. Hrsg. Jean-Marie Valentin unter Mitarbeit von Laure Gauthier. Band 5: Kulturwissenschaft vs. Philologie? Betreut von A.Bässler, L.Creczenzi, U.Steiner, T.Teruaki, H.Thomé. Bern, Berlin u.a. (Peter Lang) 2008, S. 113-118

Lieux de mémoire. Zur Differenz von Literatur und Geschichtsschreibung. In: Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien. Bd. 2. Hrsg. von der Koreanischen Gesellschaft für Germanistik, Seoul 2008, S.249-261.

Alte und Neue Weltliteratur. Zur Einführung in den Themenschwerpunkt „Weltliteratur heute“. In: Neue Beiträge zur Germanistik. Internationale Ausgabe von «Doitsu bungaku». Hrsg. Von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik 7/1 (2008). S.157-166.

Aneignung und Kritik: Yoko Tawada und der Mythos Europa. In: Études Germaniques 63 (N° 1) 2008, 131-152.

Die Wunde Erinnerung. Zur Aktualität des Gedenkens. Heinrich Heine, Jehuda Ben Halevi, Paul Celan. In: Dietmar Goltschnigg, Charlotte Grolleg-Edler, Peter Revers: Harry ... Heinrich ... Henri ... Heine. Deutscher, Jude, Europäer. Berlin (Erich Schmidt) März 2008, S. 345-360.

Vernetzt oder verletzt? Sprachspiele und Echoschrift in Yoko Tawadas „Die Ohrenzeugin“. In: glossen 27 (2008). <http://www.dickinson.edu/glossen/heft27/Artikel27/Ivanovic.html>

Exophonie, Echophonie: Resonanzkörper und polyphone Räume bei Yoko Tawada. In: Jahrbuch für Gegenwartsliteratur VI. Hrsg. P.M.Lützeler. Tübingen (Stauffenburg) 2008, S. 223-247.

Wissenschaftssprache in poetischer Funktion: Einige Anmerkungen zur Dichtung Paul Celans. In: Monika Schmitz-Emans (Hrsg.): Literature and Science. Literatur und Wissenschaft. Würzburg (Königshausen & Neumann) 2008, S. 211-225.

„Bereit, an übrigem Ort“. Hölderlins »Der Winkel von Hahrdt« als Erinnerungsort. SPUREN 79. Hrsg. vom Deutschen Literaturarchiv Marbach, 2009. 16S.

Freiheit und Offenbarung. Zur geschichtskritischen Konstruktion der Schrift beim späten Heine. Heine-Jahrbuch 48 (2009): 28-50.

Ilse Aichingers Poetik des Verschwindens. Symposium. A Quarterly Journal in Modern Literature. Bernhard, Aichinger, Grünbein, Kehlmann, and Jelinek: Literature and Austro-German Cultures of memory (Guest editor: Karl Ivan Solibakke). Volume 63, N° 3 (Fall 2009): 178-193.

### 3. 卒業論文等の題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「ハインリヒ・ハイネの『帰郷』における抒情詩の問題について」

「Martin Heckmanns: "Kommt ein Mann zur Welt"における人間観」

2009年度

「普遍と特殊の重なるところ——ゲーテにおける自然と学び——」

「文字の機能とドイツ語正書法」

「ドイツ語の接頭辞 un- を付加する形容詞について」

#### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

坂本眞一郎「シュテファン・ツヴァイクの思想と第一次世界大戦」

〈指導教員〉宮田眞治

白井智美「ドイツ語前置詞 über の意味構造」

〈指導教員〉重藤実

福田庸平「名前・職業・服装——フランツ・カフカの『城』における権力とアイデンティティの問題——」

〈指導教員〉宮田眞治

2009 年度

杉山有紀子「シュテファン・ツヴァイク『エレミヤ』と「敗北主義」の分析——平和理念を「生きる」預言者——」

〈指導教員〉宮田眞治

日名淳裕「Georg Trakl の後期作品における歴史性と対称性——散文詩『啓示と没落』と戯曲断片『小作人の小屋で...』草稿の比較分析——」

〈指導教員〉宮田眞治

平林大典「アーダルベルト・シュティフターの『晩夏』における「諦念」について」

〈指導教員〉宮田眞治

松原文「クリエムヒルトの Hortforderung——写本 C の改変を手がかりに——」

〈指導教員〉松浦純

(3)博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

海老根剛「忘我・交通・形象 ヴァイマル共和国時代のドイツにおける群集論の展開」

〈主査〉松浦純 〈副査〉重藤実・宮田眞治・平野嘉彦・神尾達之

時田郁子「ムージルの詩的人間学——『特性のない男』における〈生命の樹〉」

〈主査〉松浦純 〈副査〉重藤実・宮田眞治・浅井健二郎・赤司英一郎

2009 年度

(甲)

鈴木里香「反転と流動——カフカにおける文学のパフォーマンス」

〈主査〉松浦純 〈副査〉重藤実・宮田眞治・中澤英雄・平野嘉彦

江口大輔「ジャン・パウルの『巨人』の読解——動的構成としての筋と静的構成としての心身問題的構図」

〈主査〉宮田眞治 〈副査〉松浦純・重藤実・池田信雄・富重与志生

中丸禎子「「周縁者」たちの近代——セルマ・ラーゲルレーヴ『イエスタ・ベルリングのサガ』、『エルサレム』、および日本とドイツにおけるラーゲルレーヴ受容に関する考察——」

〈主査〉松浦純 〈副査〉重藤実・宮田眞治・川中子義勝・福井信子

## 2 2 スラヴ語スラヴ文学

### 1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年(昭和47年)、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。主にロシアの言語、文学、文化に関する研究・教育を発展させることを課題とし、また現在はロシア以外のスラヴ語圏言語文化の研究、紹介にも積極的に取り組んでいる。

現在の教員数は教授2、助教1である。その他、他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、現代ロシア語学、ロシア語史、18世紀以降のロシア文学(詩、小説、演劇、批評)、ロシア思想、日露交渉史等の諸分野、ロシアのほかポーランド、チェコ、ブルガリア、クロアチア等の諸地域に関する研究・教育が行われている。今後、時代、分野、地域についてはいっそう拡充して行くつもりである。

現在、学部学生7名、大学院修士課程院生8名、博士課程院生7名、大学院研究生1名が在籍しており、うち2名がロシアに留学中である。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2008年度と2009年度にはそれぞれ第24号と第25号が刊行された。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉学成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

また研究室では大学院生が中心となつてほぼ毎月19世紀ロシア文化研究会が開かれ、互いの研究や文献についての情報交換が行われるが、最近は大学の他の研究室や他大学からの参加者もあり、何時間も熱い議論が繰り広げられている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のロシア学、スラヴ学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、ロシアのモスクワ大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。いずれにしても、特にここ数年、大学と研究室の枠を超えて国内外の他の研究機関と協力し、広く社会と交流する中で研究成果の意味を問い直そうとする姿勢が強まってきているのが感じられる。

### 2. 構成員

#### (1) 専任教員

長谷見一雄 ロシア・ポーランド文学  
金沢美知子 ロシア文学・ロシア文化  
沼野充義 ロシア・ポーランド文学

#### (2) 助教・外国人教師などの活動

清水道子

在職期間 1993年6月～2010年3月

研究領域 ロシア文学

主要業績 「チャーホフの短編小説における創作方法——語り・視点・プロット——」, 博士論文,  
1992年10月

「テキスト・語り・プロット——チャーホフの短編小説の詩学——」, ひつじ書房, 1994  
年10月

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧



2008 年度

「チャーホフ『サハリン島』とその時代」

2009 年度

「ステパン・トロフィーモヴィチ・ヴェルホーヴェンスキーの形象」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

梶山祐治「パステルナークのドラマトゥルギー —— 『盲目の美女』を中心に」  
〈指導教員〉沼野充義

2009 年度

中山佳奈「ゴンチャロフ作『オブローモフ』、その文体と構成から見た主題の分析」  
〈指導教員〉金沢美知子  
世利彰規「ロシア語の枠組み変様とモダリティ」  
〈指導教員〉長谷見一雄

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

平松潤奈「寸断されたテキスト——『静かなドン』とソヴィエト文学体制の成立——」  
〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・金沢美知子・浦雅春・桑野隆  
乗松亨平「〈現実〉の条件——ロシア・リアリズム文学の成立と植民地表象」  
〈主査〉金沢美知子 〈副査〉長谷見一雄・沼野充義・西中村浩・中村唯史  
覚張シルビア「レフ・トルストイの作品における意識の境界状態の心理描写」  
〈主査〉金沢美知子 〈副査〉長谷見一雄・沼野充義・安岡治子・川端香男里

2009 年度

(甲)

三好(竹内) 恵子「廢墟の詩学——ブツキイの作品における古典古代モチーフと現代性——」  
〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・金沢美知子・桑野隆・中村唯史  
田中まさき「レオーノフ『泥棒』の研究」  
〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・金沢美知子・浦雅春・野中進

(乙)

石川達夫「チェコ民族再生運動研究」  
〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・石井規衛・長與進・林忠行

## 2 3 現代文芸論

### 1. 研究室活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程(略称「現文」)は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修過程」(略称「西近」)を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつ

の言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修過程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励した結果、2007年からまさにそのような目的を持つ留学生が大学院に入学していることは注目に値する。また最近では外国人研究員、研究生を積極的に受け入れている。

専任教員一人ひとりが、それぞれ専門とする地域の文学の研究・教育に従事していることはいまでもないが、2008年度からは従来のロシア・東欧文学、アメリカ文学の専門家に加えてラテンアメリカ文学を専門とする専任がスタッフとなったことで、カバーする地域が大きく広がった。さらに、こうした地域との関わりばかりでなく、「世界文学」「翻訳」「批評」「近代日本文学」などをキーワードに、「現代文芸論的」なアプローチの研究教育にも携わり、教員間の意見交換、交流も活発に行っている。また、専任教員と研究活動に関わる若手研究者たちの寄稿による現代文芸論研究室論集『れにくさ』第1号(2009)を刊行した。

非常勤講師による授業も、イディッシュ語、ポーランド語などの外国語をはじめ、表象文化、言語理論、幻想文学など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。

## (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、2008年には博士課程に2名、修士課程に4名、さらに2009年には博士課程に4名(うち外国人留学生3名)、修士課程に5名の学生が入学している。これらの学生のバックグラウンドは実に多様であり、そのことも刺激となって、学生相互の交流はきわめて盛んである。

## (3) 研究室としての活動

国内外から研究者・文学者を招いての講演会・シンポジウムなどの開催も活発で、多くの参加者を得ている。主なものを挙げれば(以下敬称略)、2008年度は、クロアチア作家との懇話会(4/8)、シンポジウム「世界の文学とラテンアメリカ」(ゲスト:桜庭一樹、6/29)、国際ワークショップ「翻訳と世界文学」(7/11)、詩をめぐるワークショップ(ゲスト:山崎佳代子、10/2)、スチュアート・ダイベック講演会(10/25)、シンポジウム「未来への郷愁」(ゲスト:多和田葉子、細川周平、11/12)、シンポジウム「Reading, Teaching, and Translating Japanese Literature」(ゲスト:Jay Rubin 他、12/15)、2009年度はシンポジウム「エステルハージ・ペーテル氏を迎えて」2/11)、レベッカ・ブラウン講演・朗読会(5/17)、ジョアン・ルイス・ヴィエイラ博士特別講義「ファヴェーラ映画と民族を超える〈他者〉」(5/22)、特別講演会「リービ英雄を囲んで」(6/29)、今福龍太特別講義(7/13)、グレゴリー・サンブラーノ特別講義「ガルシア=マルケスと安部公房」(7/14)、シンポジウム「七月の夜—ブルーノ・シュルツ祭」(パネリスト:赤塚若樹、加藤有子他、7/20)、特別セミナー「ベトナムにおける現代日本文学の受容」(ゲスト:ルオン・ヴィエト・ズン、10/5)、ヴィクトル・シェンドロヴィチ特別講義「ロシア—現実と自己感覚」(10/28)、ボリス・アクーニン国際交流基金賞受賞記念講演会「日本と私」(国際交流基金と共催、10/9)、オックスフォード大教授アンドレイ・ゾーリン特別講義「境界を越える感情」(10/17)、オリガ・スラヴニコワ特別講演(10/22)、ウラジーミル・カミーナー講演(11/10)、ヴラジーミル・ヴェルトリーブ講演(11/13)、シンポジウム「失われた父を求めて—ダニロ・キシユ 収容所の詩学」(パネリスト:奥彩子、山崎佳代子他、11/21)など。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

教授:野谷文昭(ラテンアメリカ文学 2008年度より専任)

教授:柴田元幸(アメリカ文学、翻訳論)

教授:沼野充義(ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ)

## (2) 助教の活動 (2008～2009 年度)

毛利公美

在職期間 2007 年 4 月～2010 年 3 月

研究領域 ロシア文学

業績 (2008～2009 年度)

論文

「里帰りしたロリータと子供たち：ソ連、ロシアにおける『ロリータ』の受容と変容」 『英語青年』 2008 年 4 月号. 19-22.

口頭発表

「ナボコフの映画的手法一言葉から映像へ：*Lolita* と *Lolita: A Screenplay*」 (2008 年 5 月 31 日 日本ナボコフ協会研究発表会、東京海洋大学。

研究活動など

科研費若手研究 (B) 越境の詩学-亡命ロシア文化における映像文化と文学の接点としてのナボコフ研究 (2006～2008 年度) 研究代表者。

日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト」(プロジェクトリーダー：沼野充義) 研究領域 V-1「伝統と越境-とどまる力と越え行く流れのインタラクション」第 2 グループ「越境と多文化」(2004 年～2009 年 3 月まで) 分担研究者。

シンポジウム企画など

「飛び出す人文・社会科学 ～津々浦々学びの座～」『規範と境界を超える文学——ダニイル・ハルムスをめぐって——』 2009 年 3 月 30 日 東京大学法文 2 号館 1 番大教室 主催：日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト」研究領域 V-1 第 2 グループ「越境と多文化」(代表者：楯岡求美/神戸大学) の共同企画者。

ナボコフ関係特別連続講義シリーズ「The Spring in Hongo 本郷の春」 2010 年 3 月 19 日～29 日 東京大学文学部スラヴ文学演習室 主催：現代文芸論研究室・スラヴ文学研究室 外国からのゲスト講師を招いての 6 件の連続講義の共同企画・組織者。

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008 年度

「母語教育から『ことば』の教育を考察する」

「『とりかえばや物語』の女君とジェンダー」

「損なわれた無垢——ドストエフスキー『虐げられた人びと』論」

「イタリアを描く作品の比較と考察」

2009 年度

「石榴のシンボリズム」

「『R. U. R.』論——カレル・チャペックの文学における「相対」の探求」

「誰と話しているの?——『ピーナッツ』における、見えるコミュニケーションと見えないコミュニケーション——」

「土地の詩学：フォークナー、中上、ガルシア=マルケスの時空」

「『ボヴァリー夫人』を読む——平凡性をめぐって」

### (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

伊達文「『文学という弱い立場』を通して考えるノサックの思想」

(指導教員) 沼野充義

Beata Maria Kowalczyk「今村昌平による『楯山節考』の研究」

(指導教員) 沼野充義

Surovyi Viacheslay「日本語の文化的キーワードとその翻訳可能性—英訳、露訳、ウクライナ語訳に即して」

(指導教員) 沼野充義

## 2009年度

片山耕二郎「芸術家が客体として描かれた小説の研究——ホフマン、バルザック、ヘンリー・ジェイムズを巡って——」

〈指導教員〉沼野充義

山田美雪「マヌエル・プイグ——偏在する慈愛の母——」

〈指導教員〉野谷文昭

津野将輝「『エーリカ・ミッテラーとの詩による往復書簡』におけるリルケ晩年の詩学」

〈指導教員〉沼野充義

小澤裕之「文学と反復」

〈指導教員〉沼野充義

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

秋草俊一郎「訳すのは『私』：ウラジミール・ナボコフにおける自作翻訳の諸相」

〈主査〉沼野充義 〈副査〉野谷文昭・柴田元幸・長谷見一雄・諫早勇一・若島正

## 24 西洋史学

### 1. 研究室活動概要

西洋史学研究室は1887年に史学科として発足した後、1919年に西洋史学科として独立、講座の増設や制度の改変を経て、現在の専修課程に至っている。おもにヨーロッパ史に関する研究および教育に従事している。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2008年度には教授4名、准教授1名、助教1名で構成され、2009年に1名の教授を新たに迎えた。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教授2名から、学部講義に関しては多彩な非常勤講師陣（2008年度5名、2009年度5名）から協力を得ている。

学部の専修課程は毎年ほぼ定数25名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2008年度56名、2009年度55名である。学部生に対しては西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程4名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2008年度40名、2009年度35名である。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備をおこなう。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、さらに異文化接触や公共圏の問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。

また学会活動への参与も精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行し

ている。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録 IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録 IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集協力を研究室として引き受けている。さらに各教員は、自ら海外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、海外の研究者と連携して、国内外で国際会議や講演会を定期的開催し、その成果を邦語（翻訳）や欧語で公刊している。2009年度に開催された世界歴史家会議では、他の研究室とともに運営に協力した。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。2009年度は研究室としてケインブリジ大学の若手研究者を研究員として受入れた。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

近藤和彦	教授	近代イギリス史
石井規衛	教授	現代ロシア史
深澤克己	教授	近代フランス史
姫岡とし子	教授	近現代ドイツ史（2009年着任）
高山博	教授	西洋中世史
橋場弦	准教授	古代ギリシア史

### (2) 助教の活動

加藤玄 1972年7月9日生  
在職期間 2006年4月1日～2007年3月31日 助手  
2007年4月1日～2008年3月31日 助教  
研究領域 中世フランス史  
業績  
（論文）「エドワード一世のアキテーヌ巡幸」『創文』513（2008年）、18-22頁

佐藤昇 1973年10月16日生  
在職期間 2009年4月1日～現在 助教  
研究領域 古代ギリシア史  
業績  
（単著）『民主政アテナイの賄賂言説』山川出版社（2008.11）  
（学術論文）“Athens, Persia, Clazomenae, Erythrae: an analysis of international relationships in Asia Minor,” *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 49 (2006 (published in 2008.12)), 23-37  
“Religious and Political Trial: Another Aspect of Anytus’ Prosecution against Socrates,” *KODAI: Journal of Ancient History* 15 (2005-08 [published in 2010.3]) 25-40  
「ヒュポモシアー——デーモステネース 18番 103節の解釈をめぐって」大芝芳弘、小池登編『西洋古典学の明日へ』（知泉書館、2010.3）311-332  
（学会報告）“Out-of-Court Settlement in Democratic Athens”, The Second Euro-Japanese Colloquium of Ancient Mediterranean World, The University of Tokyo, 2009.3.27-29  
（非常勤講師）東洋大学文学部史学科（2009年度）

### (3) 受け入れ研究員

2009年度 ジャンルーカ・ラッカーニ博士（Dr. Gianluca Raccagni）ケインブリジ大学（西洋中世史）

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「16世紀前半トゥールーズの大青商人」

「アウグストゥスの建築に表される宗教的権威とその受容」

「近代・国民国家形成期スペインの地域ナショナリズムの興隆における、言語の扱われ方とその背景に

ついて：カタルーニャ、バスク、ガリシアの比較を通して」  
 「シュライヒャーと横断戦線構想：体制変革への展望」  
 「歴史十書の解釈とトゥールのグレゴリウスの史家としての立場に関する考察」  
 「西欧と日本の武術の比較：現代の武術が抱える問題の解決のための研究」  
 「ヴィクトリア時代の節酒運動：Teetotalism 絶対禁酒主義を中心に」  
 「サン＝マロと東インド会社：フランス・インド会社に見る商人と特権貿易の関係」  
 「ローマ共和政末期の上位公職選挙の性格：『選挙運動備忘録』を中心に」  
 「4世紀アテナイの外交決定方針と海上同盟」  
 「イギリス近代競馬の成立」  
 「英国庶民院選挙における腐敗行為の実態と議員の認識：1883年腐敗行為防止法成立過程を通じて」  
 「グラッドストーンとイギリス帝国主義」  
 「中世末期ドイツにおける聖遺物崇敬と宗教改革：ニュルンベルクの事例から」  
 「19世紀イギリスにおけるアヘンの流通・使用と規制」  
 「上海における騒擾へのイギリスのまなざし：アムリットサル事件との比較を通して」  
 「18世紀後半のネイポップ観とイギリス帝国」  
 「ナチズムの文化政策と美意識：バウハウス様式との関係から」  
 「リヴァプール・マンチェスター鉄道（1830）と諸利害□1845-55年」  
 「ロンドン コレラに関する考察：ジョン・スノーへの評価」  
 「アウグスティヌスにおけるドナティストの性格についての考察」  
 「帝政ローマ期の属州ブリタニアにおけるボウディッカ反乱について」  
 「イギリス宗教改革期の文法学校に関する考察」  
 「オットー1世治世前半期（936-954年）の東フランク王国における大公について」

## 2009年度

「精神史の史料としての Johann Hermann: Sontags- und Fest-Evangelia (1936)」  
 「在地巡礼と遠隔地巡礼の比較」  
 「19世紀後半におけるパリ外国宣教会の対日本宣教活動」  
 「キリスト教の拡大とローマ帝国——来世観・埋葬慣習との関連から——」  
 「4世紀のアテナイと第二次海上同盟」  
 「中世エルサレム王国と騎士修道会」  
 「19世紀イギリスのパブと飲酒の社会的役割の変化」  
 「戦後イタリア共和制の形成と行動党」  
 「19世紀前半におけるイギリスの対中貿易に関する政治的論争」  
 「1890年代ロシアにおける財政政策と国際関係」  
 「第一回十字軍における十字軍理念の形成とその浸透——南フランスにおける教皇庁と十字軍のネットワーク」  
 「古典期アテナイにおけるギュムナシオンと民衆」  
 「フェデリーコ二世のユダヤ人政策について」  
 「18世紀フランスの小麦粉戦争における王権と土地の対応」  
 「第二次世界大戦におけるソ連のポーランド占領政策」  
 「ヘラクレイオス帝治世下（610-641年）のビザンツ帝国におけるオリエンスの軍制」  
 「ジェファソンと奴隷制」  
 「英国1850年代前半における二大政党制の萌芽」  
 「18世紀から19世紀前半までのアイルランドにおける運動家・民衆・教会の相互関係について」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

### 2008年度

小金澤葵「ヨーゼフ二世期ハプスブルク帝国の統合とガリツィアにおける関税政策」  
 〈指導教員〉石井規衛  
 大島啓介「全連邦共産党（ボリシェヴィキ）と大衆統合、1934-39年：1936年憲法制定に注目して」  
 〈指導教員〉石井規衛

澁井雄介「1908年 ロンドン・オリンピックにおける政治と人種」

〈指導教員〉近藤和彦

2009年度

小川祐樹「14世紀前半のフィレンツェにおける商社の活動とその背景」

〈指導教員〉高山博

村松綾「スイス盟約者団代表者会議における政策決定構造——1499年を中心に——」

〈指導教員〉高山博

飯野義寿「20世紀初頭ブルターニュにおけるシヨン：農村問題重視の言説をめぐって」

〈指導教員〉深澤克己

橋本翔太「20世紀前半イギリスの教育改革とR.H.トーニー」

〈指導教員〉近藤和彦

見瀬悠「18世紀フランスにおける外国人と帰化——ブリティッシュ・ディアスポラの事例から——」

〈指導教員〉深澤克己

八谷舞「19世紀末アイルランド語復興運動における共同体の理想」

〈指導教員〉近藤和彦

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

加藤玄「エドワード1世統治下のガスコーニュ」

〈主査〉高山博 〈副査〉深澤克己・橋場弦・小松久男・池上俊一

大清水裕「ディオクレティアヌス帝治世の地方統治改革と西方諸都市」

〈主査〉橋場弦 〈副査〉高山博・本村凌二・桜井万里子・逸見喜一郎

2009年度

(甲)

山本成生「カンブレ大聖堂の聖歌隊——中世・ルネサンスにおける音楽家とその組織」

〈主査〉高山博 〈副査〉深澤克己・橋場弦・池上俊一・薮勇造

## 25 社会学

### 1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は古い。社会学が「世態学」という名で初めて講じられたのは1881(明治14)年のことである。そして、1886(明治19)年には「社会学」の名で独立の学科目となり、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919(大正8)年には社会学科となり、翌1920(大正9)年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

1961(昭和36)年に3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学(小集団論)、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の嵐の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成し、その中の社会学専門分野を担当する研究室として今日に至っている。

2009年現在の教員数は、教授5名、准教授2名、助教1名であり、カヴァーする領域は主として学説・理論、家族、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、計量、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境、知識などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は50名、また学士入学で定員10名の学生を受け入れている。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的で体系的な教育に力をいれている。

卒業後の進路は、学部学生の約3分の1は新聞、放送、出版などマスコミ関係に、約3分の1はその他の民間企業に就職し、残りは公務員になるか、あるいは社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学しているが、今後は研究所研究員や国際関係機関職員などの分野に就職していくものも増えていくと思われる。院生総数は60名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を多く輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献してきている。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。また、大学院生が中心になって、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロゴス』を毎年編集・発行している。

本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1~2年過したあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生もめだって増えてきている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

盛山和夫

専門分野 階層論

在職期間 1985年4月～現在

上野千鶴子

専門分野 性・世代・家族の社会学

在職期間 1993年4月～現在

松本三和夫

専門分野 科学社会学

在職期間 1996年4月～現在

武川正吾

専門分野 社会政策

在職期間 1993年4月～現在

佐藤健二

専門分野 歴史社会学

在職期間 1994年10月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学

在職期間 2006年4月～現在



赤川学

専門分野 社会問題の社会学

在職期間 2006年4月～現在

## (2) 助手・助教

富江直子

在職期間 2007年4月～2010年3月

研究領域 福祉社会学・歴史社会学

主要業績 『救貧のなかの日本近代——生存の義務——』2007年、ミネルヴァ書房

教育実績 2005年度～現在 流通経済大学非常勤講師

2009年度 東京理科大学非常勤講師

## (3) 外国人研究員

2008年度 李 永晶

2009年度 李 蓮花

李 英桃

## 3. 卒業論文題目等

### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「少子高齢社会における戦後型郊外住宅地——高齢化と居住についての地域社会学的考察」

「ジェンダーアイデンティティは固定化されてしまっているのか——性別区分を人種区分に並べて考える」

「メディアの中の秋葉原事件——リフレインする社会問題」

「戦後日本の動物愛護——文化国家化装置としての動物愛護」

「スポーツ応援の社会学——応援に駆り立てるもの」

「オウム真理教は特殊であるか」

「スシとグローバリゼーション」

「コミックマーケットの拡大の背景——ゆるやかな人間関係の形成」

「日本の大衆文化——海外で何がウケているのか？」

「失われた時代のマンガ消費・産業論」

「郊外化する地方と「街」

「日本型 ER——社会学的観点から見た救急医療」

「学生結婚カップルの「逸脱性」と「標準性」からみた標準的ライフコースの位置と価値」

「日本人の黒人観——その歴史と現在の姿」

「プロ野球球団にとっての地域性——球団経営に着目して」

「テレビゲームと子ども——悪影響論争はなぜ生まれたのか」

「日本における「学歴信仰」の成立過程」

「mixiにおける社会関係資本の考察」

「学校選択制の導入過程——学校選択制のもとで教育の機会均等は守られるか」

「「学力論争」の社会学的分析」

「「初年次教育」の領域——教育専門誌の言説分析から」

「スリランカの民族紛争」

「妖怪と日本人——時間軸と空間軸から」

「離家の現状——若年層の自立を考える」

「自治体行政における住民参加の可能性——小出郷文化会館を事例として」

「若年非正規労働を取り巻く言説展開——自己責任論をめぐる対立という観点から」

「日雇い派遣に未来はあるか——議論の構造の分析と参与観察から考える」

「グローバリゼーションと留学教育——学部留学生から見た東京大学」

「小劇場演劇の文化社会学——2000年代教育化をめぐる」

「ゲイ・ブームとは何だったのか——メディアにおける「ホモセクシュアリティ」の語られ方」  
「日本の独特の就職活動——「新規学卒採用制度」の検討」  
「郊外、モータリゼーション、ロードサイドの関係性——三つの要素の在り方」  
「「キャラ」コミュニケーションの社会学的研究」  
「医療紛争における裁判外紛争解決手続の可能性」  
「少年法厳罰化の背景の社会学的分析」  
「脱ケータイ否定論——社会的文脈から見たケータイ・コミュニケーション」  
「「ダウンロード違法化」から見る現代日本」  
「経営改革の主体としての大学職員——東京大学の場合」  
「「第三セクター」の言説史——1970年から2004年にかけての、マスメディア及び専門家層における「第三セクター」言説変容の研究」  
「学校空間の社会学的位置づけ——その特殊性・閉鎖性を考察する」  
「障害者が求めるもの——市民社会における移動支援の重要性から」

#### 2009年度

「都心の公共交通とマイノリティー」  
「神田神保町古書店街のまちづくりと今後の展望」  
「なぜ女性神職は増えるのか——神社における後継者問題から見るジェンダー」  
「学校制度の機能低下と社会」  
「ポスト京都議定書における環境政策の社会学的考察」  
「宇垣一成の政権構想が持つ社会的意味——政党政治の危機の時代を生きた軍人政治家」  
「感情労働者としての教師」  
「Iターン者の視点から見る行政によるIターン支援の効果と課題——長野県・新信州人倶楽部を事例にして」  
「〈他人事〉としての基地問題——沖縄米兵少女暴行事件報道の言説分析」  
「喫煙規制のレトリック——医学モデル脱却にむけて」  
「東京都再開発における文化施設のありかた」  
「新しいツーリズムからみる現代社会——エコツーリズム／グリーン・ツーリズムを中心に」  
「デンマークの労働市場の特徴"Flexicurity"についての考察——日本の労働者市場改革に向けて」  
「女子高校生が東京大学を目指すとき——首都圏共学校におけるアカデミックトラックとジェンダートラック」  
「嫌韓言説に見る日本の文化ナショナリズムの発露について」  
「現代日本の就職システムに関する考察——四年制大学・文系学部・文系学部所属する学生に焦点を当てる」  
「「世界遺産」を取り巻く市民活動——鎌倉の世界遺産登録推進運動を事例に」  
「不況下におけるエスニック・コミュニティ——大久保・百人町地域の事例から」  
「個人加盟型ユニオンにおける加入行動と活動に関する考察」  
「性犯罪被害者にとって刑事告訴は合理的なのか？」  
「腐女子を潜在化させるものは何か——オタク共同体内のジェンダー／セクシュアリティ秩序から」  
「新技術の普及時における制度の形成過程——携帯電話の電車内規制を例に」  
「血液型性格判断」  
「規制の創出過程——タバコ問題を事例として」  
「捕鯨の社会学」  
「海外市場における日本の映像産業」  
「「エコ」消費——環境保全に向けた新しい形の取り組みとして」  
「家庭科教育はどうあるべきか」  
「日本の健康格差と取り組み——海外との比較を通じて」  
「知的障害者に対する社会の視線」  
「恋愛幻想は抑圧を生みだしているか」  
「夕刊スポーツ紙の社会学——「脱マスメディア論」を超えて」  
「芸術としての現代書道の発展と制度化」  
「医療従事者の労働環境からみる医師不足・医療事故問題について」

「なぜ若い女性喫煙者は増加したのか」  
「ビジネスとしてのミュージカル——「芸術」と「商業」の舞台裏」  
「ペットの命が自然な長さであるために ～現代日本社会に探る「共生の道」～」  
「人口減少地域の町並み保存——高知県室戸市吉良川町を事例として」  
「学校教育における競争主義の是非——保護者の教育要求から考える」  
「若者の孤独感——携帯電話から見る」  
「移動機能障害者のセクシュアリティにおけるニーズとその制度化過程」  
「超高齢社会における老人クラブを考える」  
「池袋チャイナタウン研究」  
「科学知」の自然化と脱神話化」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

原田峻「スポーツ施設の管理をめぐる住民運動の展開について——垂水区団地スポーツ協会を事例として——」

〈指導教員〉佐藤健二

米澤旦「労働統合型社会的企業についての検討——共同連の活動を中心として」

〈指導教員〉武川正吾

鈴木亜希子「非正規雇用者とひとり親世帯における「社会的格差」と社会意識の計量分析」

〈指導教員〉佐藤健二

屈謐黎「中国の大都市における専業主婦層誕生及び一般化の可能性——上海を例として」

〈指導教員〉赤川学

ALZAKHGUI DELGERMAA「モンゴルにおける市場経済移行後の貧困問題——ウランバートルのゲル地区の事例から」

〈指導教員〉武川正吾

2009年度

武岡暢「盛り場における「ガバナンス」の分析——歌舞伎町商店街進行組合を中心として」

〈指導教員〉佐藤健二

開田奈穂美「市民運動・住民運動の連携とその課題——諫早湾干拓事業を事例として」

〈指導教員〉松本三和夫

佐藤善太「戦後農政の大転換」期にみる地域農業者の共同性——山形県酒田市の集落営農に注目して」

〈指導教員〉赤川学

志賀文重「医療政策の形成過程における患者団体の運動戦略——がん対策基本法を中心として」

〈指導教員〉上野千鶴子

李彩雲「社会的企業に関する実証的考察——韓国における認証社会的企業を対象として」

〈指導教員〉武川正吾

武石聡史「現代日本社会における選抜構造の変容」

〈指導教員〉盛山和夫

## (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

立石裕二「環境問題における科学と社会の相互作用および科学の自律性に関する研究——科学委託と批判的科学ネットワークに注目して」

〈主査〉松本三和夫 〈副査〉盛山和夫・武川正吾・赤川学・船橋晴俊

2009年度

(甲)

山根純佳「なぜ女性はケア労働者になるのか——女性の行為主体性と性別分業の再生産・変動」

〈主査〉上野千鶴子 〈副査〉盛山和夫・武川正吾・大沢真理・佐藤文香

妙木忍「ライフコースの多様化が生み出す女性間の対立と葛藤——戦後「主婦論争」を通して」

〈主査〉上野千鶴子 〈副査〉武川正吾・白波瀬佐和子・赤川学・本田由紀  
朴姫淑「1990年代以後地方分権改革における福祉ガバナンス——旧鷹巣町（北秋田市）の福祉政策から」

〈主査〉上野千鶴子 〈副査〉松本三和夫・武川正吾・庄司洋子・大沢真理

(乙)

宮内泰介「自然・移住・紛争の開発社会学——ソロモン諸島マライタ島民たちに見る生活の組み立て方」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉松本三和夫・武川正吾・本田洋・山本真鳥

森田数美「ホルクハイマー批判的理論の生成と展開——現代の理性批判と社会学」

〈主査〉盛山和夫 〈副査〉似田貝香門・武川正吾・佐藤健二・今井康雄

## 26 社会心理学

### 1. 研究室（専修課程）の活動等の概要

#### (1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の心理的な規定因を実証的に研究する経験科学である。そのため、社会的状況における個人の行動や認知、集団行動、組織における人間行動、文化的に規定された行動や認知の研究など幅広い研究を含んでいる。

現在は、社会文化研究専攻の社会心理学コースとして、教授2名、准教授1名、講師1名、助教1名で運営されている。それぞれの教員が独自の領域で研究を進めながら、協力しあって教育を行っている。社会心理学研究室は、創設四半世紀を越えたばかりで、人文社会系研究科の中では新しい研究室であるが、研究及び教育活動は活発に行われている。

社会心理学研究室の特色は、その学問の性質上必然的なことであるが、国際性にある。各教員が国際的な共同研究を行っており、海外からの研究者が多く訪れている。彼らを迎えて社会心理学研究室主催のコロキウムも多数実施しており、アメリカ、カナダ、イタリア、オーストラリアおよび日本の研究者によって、2008年度は3回、2009年度は5回開催した。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究は、掲示板に貼り出されているので、誰でもその概要を知ることができる。より詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ <http://www.socpsy.L.u-tokyo.ac.jp/japanese/> に公開されている。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

本研究室では、国内外の学会活動も盛んに行っている。多くの教員が、国内外の学術雑誌の編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、社会心理学関係の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本社会心理学会、日本グループダイナミクス学会、アジア社会心理学会、日本世論調査協会、日本選挙学会、社会言語科学会、国連高齢者会議などの役職者として、学会運営にも大きな貢献をしている。

#### (3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

研究室所属の大学院生も積極的に研究を行っている。その成果は、毎月行っている研究室全体のリサーチミーティングで議論され、さらに、学会発表された後、専門学術誌や学術書に掲載されている。大学院生もその多くが国際的に活動しており、学生の多くは、毎年国際学会で英語の口頭発表を行っている。過

去2年間に、英語論文が、専門誌や学術書の1章として公刊されている。

#### (4) 国際交流の状況

ミシガン大学との国際交流協定締結のホスト役を果たしていることに加え、各教員が国際共同研究・国際共同調査に参加しており、かつ学会レベルでの国際交流も盛んである。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

山口 勸 教授

在職期間 1987年10月～現在

専門分野 社会心理学

池田謙一 教授

在職期間 1992年4月～現在

専門分野 社会心理学

唐沢かおり 准教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

ジル・スティーブル 専任講師

在職期間 2007年4月～現在

専門分野 政治学

#### (2) 助教の活動

月元 敬

在職期間 2007年4月～現在

専門分野 認知科学

主要業績 月元 敬・平野哲司 (2009). 記憶結合エラーへの集合論アプローチ—二つのモデルの明確化及び新しい過程分離手続きの提案— 心理学評論, 52, 207-227.

#### (3) 外国人教師の活動

ジル・スティーブル (専任講師)

在職期間 2007年4月～現在

専門分野 政治学

主要業績 Martin, S. L., & Steel, G. (Eds.) (2008). *Democratic reform in Japan: Assessing the impact*. Lynne Rienner Pub.

Steel, G., & Kabashima, I. (2008). Cross-regional support for gender equality. *International Political Science Review*, 29(2), 133-156.

担当授業 リサーチデザインとアカデミックプレゼンテーション, アカデミックライティング (院), 応用社会心理学演習, 社会心理学調査実習, 社会心理学演習 (院)

#### (4) 受け入れた外国人研究員

- ・ Jeffrey Boase (Ph.D., Toronto University) 2006年10月～2008年12月
- ・ Rosario Laratta (Ph.D., The University of Warwick) 2006年10月～2010年11月
- ・ Choi Insook (Ph.D., Institut d'Etudes Politiques de Paris) 2009年10月～2011年9月
- ・ Michael W. Myers (Ph.D., University of Oregon) 2009年11月～2011年9月
- ・ Chong-Min Park (Ph.D., University of California, Berkeley) 2010年7月

### 3. 卒業論文等題目

#### (1) 卒業論文題目一覧

2008年度

「大学生の無気力 (スチューデント・アパシー) に関する社会心理学的研究」

「Illusory correlation の商業分野への応用について」  
「消費者のメディア利用が購買行動に与える影響：培養理論における主流形成効果の観点から」  
「コミュニケーション及びメタ認知「視点取得が同調行動に及ぼす効果」  
「リスク回避傾向が寛容性に与える影響——異質な他者を『リスク』とみなすことが社会に何をもたらすか——」  
「一般的信頼感、安心感、寛容性とネットワークの拡大および愛着、互酬性が情報収集に与える影響について」  
「インターネット上の口コミ情報における、匿名性と専門性が信頼度「購買意欲に及ぼす影響」  
「食品リスクの内容と個人的特性が、リスク直面後のコミュニケーションに及ぼす影響」  
「検索連動型広告が検索結果満足度およびブランドエクイティに及ぼす効果：検索連動型広告研究への心理学的アプローチ」  
「組織コミットメントと働くことに伴う不安の関係について」  
「新人保育士「幼稚園教諭の職場対人関係ストレスに関する質的研究」  
「リスク管理情報に対する信頼「安全性意識を高める要因」  
「価値観が政治参加に及ぼす影響～自己実現欲求「私生活志向を中心に～」  
「テレビCMがジェンダーに関する価値観に与える影響」  
「脆弱な現実感——社会が我々のリアリティーに与える影響——」  
「企業の社会貢献活動がブランドイメージに与える影響」  
「介護受容に対する態度へ心理学的要因がもたらす影響の検討」  
「日本の経済格差および生活保護制度への態度に影響する心理学的要因の検討」  
「ジェンダーステレオタイプにおける心理的リアクタンスの効果——性役割規範の押し付けが女性に与える影響の検討——」  
「環境リスク認知・対処有効性認知が環境配慮行動に与える影響」  
「Determinants of willingness to make economic sacrifices for the environment: A focus on comparative responsibility and effort attributions in Bulgaria, the Czech Republic and the Netherlands」  
「対人不安はなぜ生じるか？～自己内省「自尊心特性や自己意識感情スタイルとの関係から～」  
「企業の信頼を構成する要因について」

## 2009 年度

「顕在的自尊心と潜在的自尊心の齟齬と行動選択の関係について」  
「説得に及ぼすユーモアの関連感情・無関連感情の効果」  
「懸念的被透視感が欺瞞認知に及ぼす影響について」  
「大学生の生き方志向と性格特性との関連に関する研究」  
「環境問題に関する態度とリテラシー能力が環境配慮行動に与える影響」  
「mixi 内の人間関係が mixi 日記意向に与える影響」  
「環境広告のフレーミングが受け手のイメージに与える影響～精緻化可能性モデル、関与、メディア「リテラシーを用いて～」  
「集団での創造的問題解決——批判が創造性に与える影響——」  
「援助者と被援助者の認知・感情の不一致について——返報の有無による効果——」  
「「やさしさ」に関する価値観とリスク回避傾向が Twitter 利用に与える影響」

## (2) 修士論文執筆者・題目一覧

### 2008 年度

李珠「自己呈示場面に用いられる言語表現と自尊心との関連について」  
（指導教員）山口勸

### 2009 年度

長島洋介「ソーシャルサポートが心理的側面と適応的な関係となるための条件——メタ分析による検証——」  
（指導教員）山口勸  
池田真季「Never say “Let’ s discuss politics” : The indirect effects of political conversation on

political participation」

〈指導教員〉唐沢かおり

杉本奈穂「日常生活におけるマスメディアに対するリテラシー獲得の諸相——社会関係資本およびインターネット利用との関係から——」

〈指導教員〉池田謙一

橋本剛明「Functional Dissimilarity of the Transgressor Apology for the Victims and the Third-parties: The Roles of Cognition and Emotion towards Forgiveness」

〈指導教員〉唐沢かおり

### (3) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

針原素子「日本人の自己卑下的自己呈示に関するネットワークモデルの構築」

〈主査〉山口勸 〈副査〉池田健一・唐沢かおり・秋山弘子・森尾博昭

村上史朗「自尊心の測定における潜在的認知指標の有効性：潜在的連合テストを用いた検討」

〈主査〉山口勸 〈副査〉池田健一・唐沢かおり・秋山弘子・村本由紀子

小林哲郎「インターネット利用の社会的帰結——異質な情報・他者との接触の社会的寛容性への効果を中心に——」

〈主査〉池田健一 〈副査〉山口勸・唐沢かおり・秋山弘子・山田真裕

2009年度

該当なし

## 27 文化資源学

### 1. 研究室等の活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

2000年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化経営学、形態資料学、文字資料学の3コースから成り、文字資料学コースはさらに文書学、文献学の専門分野に分かれる。

この構成はつぎのように発想された。われわれの前には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書は書かれた「ことば」、文献は書物になった「ことば」であり、多くの人文社会系の学問は、もっぱらそれらの「ことば」を相手にしてきた。しかし、学問領域はあまりにも細分化され、また情報伝達技術の発達は「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えた。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、おそらくそこから無数の「かたち」が視野の外へと追いやられている。さらに「ことば」にも「かたち」にも残りにくい「おと」の文化をも見落とすべきではないと考える。

そこで「文化」と呼ばれてきたものを、「おと」「かたち」「ことば」という根源に立ち返って見直し、多様な観点から新たな情報を取り出し、社会に還元する方法を研究することが求められるようになった。それが「文化資源学」であり、とくにその後半部が「文化経営学」と呼ばれるものである。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度など

の過去と現在と未来を考えようとするものだ。

専任教員 10 人（文化経営学 2 人、形態資料学 3 人、文字資料学 3 人、外国人客員教授 1 人、助教 1 人と学外連携併任教員 3 人）からなる。文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを繁栄して、美術史学、博物館学、文化政策学、文化行政学、音楽学、演劇学、社会学、民俗学、フランス文学、中国文学、歴史学など多彩な研究者が参加している。さらに学内の史料編纂所や総合研究博物館、学外の国立西洋美術館や国文学研究資料館と機関連携協定を結んで客員教員の派遣を受けている。今後とも、学外の研究機関・文化機関との連携をさらに充実させていく構想である。

## (2) 大学院専攻・コースとしての活動

2008 年度の修士課程入学者は 9 人（うち社会人学生が 6 人）、博士課程入学者が 6 人（うち社会人学生が 2 人）、2009 年度の修士課程入学者は 10 人（うち社会人学生が 5 人）、博士課程入学者が 4 人（うち社会人学生が 1 人）であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあつては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生の多くは、民間の企業や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接に進学してきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

### ・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いかけるフォーラムを、毎年開催してきた。2008 年度は「つくる・えらぶ・のこす——高度経済成長期の東京景観考」と題し、2008 年 12 月 17 日から 20 日まで、学内工学部ギャラリースペースで展覧会を、その最終日には法文 2 号館 2 大教室でフォーラムを開催した。また、2009 年度は、「めぐりゆくまなざし——発見され続ける銭湯」をテーマに、法文 2 号館 1 大教室でフォーラムを、2 大教室で展覧会を同時開催した。

### ・公開講座の開催

パナソニック株式会社からの寄付金により、東京大学文化資源学公開講座「市民社会再生」を開催した。2007 年度に引き続き、2008 年度および 2009 年度も開催し、各年度のテーマはそれぞれ「文化の射程」、「新しい理論構築に向けて」とした。前者が全 13 回、後者が全 10 回の開催を重ね、それぞれ 101 人、57 人の参加者を得た。

## (3) 学会運営、研究誌の発行など

2002 年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2008 年 3 月に第 6 号、2009 年 3 月に第 7 号を刊行した。2009 年度の会員数は 303 人である。

## (4) 国際交流の状況

2008 年度博士課程に 1 名、2009 年度修士課程に 1 名、同じく博士課程に 1 名の外国人留学生を受け入れた。いずれも国籍は韓国である。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

- 木下 直之（文化経営学）
- 小林 真理（文化経営学）
- 古井戸 秀夫（形態資料学）
- 渡辺 裕（形態資料学）
- 佐藤 健二（形態資料学）
- 月村 辰雄（文字資料学・文献学）
- 片山 英男（文学資料学・文献学）2008 年度退任
- 大西 克也（文字資料学・文書学）
- 中村 雄祐（文字資料学・文書学）2009 年度着任



## (2) 助手の活動

福島勲

在職期間：2007年4月～2011年3月

研究領域：フランス文学

主要業績（2008～2009年度）

論文

「日本の欧文新聞紙に見るファルサーリの活動」『1880年代の民間レベルにおける日伊芸術交流史の再検討：写真家アドルフ・ファルサーリとブルボン家エンリコ・バルディ伯爵の随臣アレクサンドロ・ツィレーリ伯爵の日本での活動』、平成17-19年度科学研究費補助金基礎研究（B）（2）研究成果報告書、2008年、50-55頁

「ブニュエル講座第六回・前衛芸術編：自由、スキャンダル、パリ」『ルイス・ブニュエルDVD-BOX6』特製ブックレット所収、紀伊国屋書店、2008年、22-35頁

「共同体を解体する文学：デュルケム、タルド、バタイユをめぐって」『LAC [Literature, Art, Community] ワークショップ論文集』第2号、日本学術振興会／人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業V-3「文学・芸術の社会的機能の研究（LAC）」発行、2009年、7-15頁

## (3) 外国人客員教授の活動

ニコル・ルーマニエール：2006年10月～2009年9月

研究領域：日本現代工芸史・東洋陶磁器史

担当講義：文化資源学特殊研究「陶磁器と日本文化」（2008年度）

文化資源学演習「日本を展示する」（2008年度）

文化資源学演習「文化資源学の原点」（2008年度）

文化資源学特殊研究「陶磁器と日本文化」（2009年度）

文化資源学演習「国際美術展プロデュース入門」（2009年度）

文化資源学演習「文化資源学の原点」（2009年度）

ジョン・カーペンター：2009年10月～2011年3月

研究領域：日本書道史・浮世絵史

担当講義：文化資源学特殊研究「浮世絵と摺物の研究」（2009年度）

文化資源学演習「ヨーロッパとアメリカにおけるコレクション：日本の書・絵画・摺物」（2009年度）

文化資源学演習「文化資源学の原点」（2009年度）

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

文化経営学

豊田梨津子「創造活動振興のための条件——ボナー・クストフェラインの現代美術振興」

〈指導教員〉小林真理

黄茗詩「大学におけるアートマネジメント教育の有効性と可能性について」

〈指導教員〉小林真理

張依文「台湾自治体文化政策の課題——文化振興条例制定の可能性について——」

〈指導教員〉小林真理

形態資料学

川瀬さゆり「1830年代におけるシャルトル大聖堂の価値成立過程」

〈指導教員〉渡辺裕

金世一「演技における俳優の自己意識に関する研究——李潤澤版「ロビンソンとクルーソー」を中心に——」

〈指導教員〉古井戸秀夫

2009年度

文化経営学

遠藤文博「景観としての里山の成立と「原風景」化」

〈指導教員〉小林真理

岡本真祐子「非西洋社会における展示空間の形成と役割——インド・バローダ州立ミュージアム& 絵画ギャラリーにおけるヘルマン・ゲッツの活動（1943-1953）」

〈指導教員〉木下直之

菅野幸子「英国の文化政策における意思決定過程の検証～地方ミュージアム改革の事例を通して」

〈指導教員〉小林真理

花房太一「戦後日本美術の国際性～日本国際美術展をめぐる～」

〈指導教員〉木下直之

赤星友香「議論・対話による地域づくりの可能性——ニューヨーク州サリヴァン郡ベセルとウッドストック・フェスティバルの事例より——」

〈指導教員〉小林真理

有賀沙織「菊田一夫と東宝現代劇 日比谷「芸術座」における演劇興行システムの形成 1954 年～1960 年を中心に」

〈指導教員〉小林真理

横山梓「茶の湯文化と美術館・博物館の関係性——茶道具展示の成立過程の考察——」

〈指導教員〉木下直之

形態資料学

女屋美咲「ストックホルム博覧会宣言文『アクセプテラ』とエレン・ケイの『家庭における美』において提唱されたデザイン共通点と相違点」

〈指導教員〉佐藤健二

岸本伸憲「銅像の成立——明治～昭和初期を中心に——」

〈指導教員〉木下直之

## (2) 博士論文執筆者・題目一覧

2008 年度

(甲)

文化経営学

朴昭炫「近代美術館」をめぐる「公共性」の歴史的構造」

〈主査〉木下直之 〈副査〉渡辺裕・小林真理・三浦篤・五十殿利治

形態資料学

高野光平「テレビCMのメディア史／文化資源学——初期テレビ放送におけるCM概念」

〈主査〉佐藤健二 〈副査〉渡辺裕・木下直之・古井戸秀夫・長谷正人

2009 年度

(甲)

形態資料学

佐治ゆかり「近世庄内における芸能興行の研究——鶴岡・酒田・黒森——」

〈主査〉古井戸秀夫 〈副査〉木下直之・佐藤健二・長島弘明・福原敏男

## 28 韓国朝鮮文化研究専攻

URL : <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~korea/index.html>

### 1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本では初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

#### (1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、考古学1名、社会学1名、文化人類学1名、言語学1名、哲学1名の、合計6名の教員で構成され、外国人客員教授1名が在籍している。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程(定員12名)が開設され、2004年度から博士課程(定員6名)が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。ただし、2007年度以前に入・進学した学生は旧3コースのいずれかに所属している。専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い、東洋史学、西洋史学、考古学、社会学、言語学、中国思想文化学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

#### (3) 研究室としての活動

##### 1. コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2008年度は6回、2009年度は3回開催した。

##### 2. 講演記録の発行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録(2008年度)』(2009年3月)、『同(2009年度)』(2010年3月)を刊行した。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 教員

#### 韓国朝鮮歴史社会コース

教授	服部民夫	開発の経済社会学
准教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
准教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史
准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究

#### 韓国朝鮮言語思想コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
准教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
客員教授	金星奎	韓国語学(2008年度)
客員教授	鄭承喆	韓国語学(2009年度)

#### 北東アジア文化交流コース

准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
-----	-----	----------------

#### 韓国朝鮮歴史文化コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
----	------	-----------------

准教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
准教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史
韓国朝鮮言語社会コース		
教授	服部民夫	開発の経済社会学
准教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
客員教授	金星奎	韓国語学（2008年度）
客員教授	鄭承喆	韓国語学（2009年度）

## (2) 助教

崔蘭英（2008年9月30日まで）	韓国近代史
木村拓（2009年4月1日から）	朝鮮近世史

## (3) 受け入れた研究員

学術振興会特別研究員

橋本繁

研究期間 2008年4月1日～2011年3月31日

研究題目 韓国出土木簡よりみた新羅の地方社会に関する研究

外国人研究員

姜賢淑（韓国、東国大学校教授）

研究期間 2008年9月1日～2009年8月31日

研究題目 考古学からみた高句麗と渤海の継承関係

鄭容郁（韓国、ソウル大学校教授）

研究期間 2008年12月1日～2009年2月28日

研究題目 「在日朝鮮人」のマッカーサーへの手紙から見る米国の日本占領——「占領」の重層性と韓日比較

張美

研究期間 2009年10月1日～2010年9月30日

研究題目 韓国語と日本との韻律構造と分節音に対する音声学的特性比較

## (4) 国際交流の状況

東京韓国語学国際学術会議（韓国ソウル大学校人文大学と共催）・国際儒教文化フォーラム（韓国成均館大学校儒教文化研究所と共催）の開催など、韓国の大学・研究機関との学術交流に本研究室の教員や学生が関与した。

## 3. 論文等題目

### (1) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

韓国朝鮮歴史社会コース

柿本鶴子「植民地期朝鮮における綿織物の流通構造——1920～1930年代の木浦地域を分析対象として——」

〈指導教員〉六反田豊

韓国朝鮮言語思想コース

全恵子「現代韓国語の先語末尾語{-烈-}の文法的機能について

〈指導教員〉福井玲

王熙威「旅軒帳頭光の太極思想——朱熹太極観の継承と発展——」

〈指導教員〉川原秀城

2009年度

韓国朝鮮歴史文化コース

伊東沙織「植民地朝鮮における「児童中心主義教育」の展開——1920年代の官・公立普通学校を中

- 心に——」  
 〈指導教員〉六反田豊  
 野崎景子「植民地期朝鮮におけるキリスト教と独立運動——吉善宙牧師の事例から——」  
 〈指導教員〉六反田豊  
 文聖姫「北朝鮮の対外開放政策と「合営法」」  
 〈指導教員〉早乙女雅博  
 韓国朝鮮言語社会コース  
 藤村加那子「2008年の「ろうそくデモ」と若者の政治参加——現代韓国の社会運動についての一考察——」  
 〈指導教員〉本田洋  
 五十嵐祥子「星湖李瀾の天文・地理認識——経書研究と西学受容——」  
 〈指導教員〉川原秀城

## (2) 博士論文執筆者・題目一覧

2009年度

(甲)

- 韓国朝鮮歴史社会コース  
 豊島悠果「高麗王朝の儀礼——その形成と国際環境——」  
 〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・村井章介・小島毅・吉田光男

## 29 言語動態学

### 1. 研究室の活動等の概要

#### (1) 研究分野の概要

本専門分野では、各教員の研究成果と専門知識、現地調査で培った国際経験を最大限に活用した多面的な授業と研究指導が行われる。本研究室所属の教員の専門とする地域はオーストラリア(角田)、中南米(中村)であるが、各教員とも、現在の研究テーマ-オーストラリア原住民語、言語類型論(角田)、文字や図など認知的人工物の研究、途上国の社会開発(中村)-をふまえつつ、多言語社会における言語的少数者のあり方の問題への関心、収集・蓄積した言語資料をコミュニティーと共有して活用するしくみの確立の重要性の認識、フィールド・サイエンス型の研究方法の重視など、基本的な考え方を共有している。

なお、2009年度に言語動態学専門分野は言語学専門分野と統合され、あらたに言語学専門分野となった。

#### (2) 大学院の専攻・コースとしての活動

教授1名(2008年度まで)、准教授1名。

2008年度は修士課程3名、博士課程6名、2009年度は修士課程2名、博士課程5名が在籍している。

#### (3) 研究室としての活動

本研究室は、その前身の東洋言語研究室(1994.4~2004.3)の時代から、世界の危機言語(endangered languages: 話者が急速に減少し、1~2世代で消滅する恐れのある言語)に関するデータベースを、研究室のWebサーバーで公開しており、それがこの研究室の特色の1つとなっている。

研究室ホームページには、

(a) 危機言語レッドブック（アフリカ，ヨーロッパ，ロシア・シベリア，アジア，南アメリカの危機言語に関するデータ集）

(b) ロシアの少数言語文献ガイド（ロシアの話し手が5万人以下の言語に関する文献案内）

(c) 危機言語文献リスト（危機言語に関する研究文献の網羅的リスト）

という3つの「危機言語」「少数言語」関連のデータベースが置かれている。

（「危機言語のホームページ」<http://www.tooyoo.l.u-tokyo.ac.jp/ichel/ichel.html> 2009年度末閉鎖）

#### (4) 国際交流の状況

教員は、オーストラリア、グアテマラ等の研究者と継続的な研究交流を行っている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 専任教員

教授：角田太作 オーストラリア原住民語、統語論、言語類型論、危機言語の諸問題

准教授：中村雄祐 途上国の社会開発、認知科学

## 3. 卒業論文等題目

### (1) 修士論文執筆者・題目一覧

2008年度

守谷彩子 “Visible Languages of Signs in Shinjuku Station – Analysis of Texts and Pictograms”

〈指導教員〉中村雄祐

今西一太 “A basic description of the Ami language (Taiwan)”

〈指導教員〉角田太作

2009年度

麻生玲子 「琉球語波照間方言の動詞と助詞の研究」

〈指導教員〉角田太作

### (2) 博士論文執筆者・題目一覧

2008年度

(甲)

海老原志穂 「青海省共和県のチベット語アムド方言」

〈主査〉角田太作 〈副査〉中村雄祐・林徹・長野泰彦・星泉

## 30 次世代人文学開発センター

### 1. 研究室等の活動の概要

#### (1) 研究分野の概要

1966（昭和41）年度に文学部各専修過程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組されて2005（平成17）年度より現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがっ

て、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。次の3部門から構成されている。

a. 先端構想部門（＜文化交流＞、＜東アジア海域交流＞）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ない、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。平成17年度よりセンター主任として小佐野重利教授のほか、小島毅准教授が兼担教員、松山聡助教が専任教員で、平成21年度から佐藤慎一教授が特任教授である。また本部門には、小島准教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成17年度から平成21年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成—寧波を焦点とする学際的創生」の拠点がある。教育面では、学部の「文化交流特殊講義」（非常勤講師による）、「東アジア海域交流」および「文化交流演習」を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信している。センター紀要として、『文化交流研究』第21号（2008）と『文化交流研究』第22号（2009）を刊行した。また、平成18年度より研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を兼ねて開始した文化交流茶話会を平成20年度、21年度も継続し、第12回から第18回まで実施した。

b. 創成部門（＜死生学＞）

平成17年度に島菌進教授（宗教学宗教史学）を兼担教授として設置された。その前段階は平成14年度に21世紀COE研究拠点プログラムの一つとして採用され、5年間23人の教員が事業推進担当者となって進めてきた「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」のプログラムである。平成19年度に本部門に寄付講座として設置された上廣死生学講座と、また平成19年度から5年間15人の教員が事業推進担当者となって進めてきた21世紀COE研究拠点プログラム「死生学の展開と組織化」と連携して、死生学の将来的な発展に向けて体制を整えていくのが創成部門（＜死生学＞）の役割である。教育面では、現在のところ大学院を終えて博士号を取得したPD（ポスドク研究員）を中心に博士課程の大学院生が加わり、学際的な研究推進の訓練を受けるとともに、教員とともに新たな学問分野の構築に携わってきている。死生学講座は学科や専門課程とは異なり、当面は本部門に所属する学生、大学院生はもたない。

c. 萌芽部門（＜演劇学＞、＜イスラーム地域研究＞、＜データベース拠点＞）

2006年4月に古井戸秀夫教授を専任教員として開設された、新しい研究部門である。目的は、演劇学・舞踊学の確立である。哲学（美学）・文学（国文学）・歴史学（日本史）を中心に展開されてきた研究の成果を基盤として、演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのようにして構想するか、ということが課題になる。教育面では、大学院人文社会系研究科文化資源学専攻において、講座を持つ。日本の演劇・舞踊は、形態資料・文字資料として、いかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、ということを実証する。文学部では、啓蒙的な特殊講義「歌舞伎入門」を開設した。

加えて本部門には、＜イスラーム地域研究＞（別にイスラーム地域研究センターとも呼ぶ）ならびにくデータベース拠点・大蔵経もある。

＜イスラーム地域研究＞は、大学共同利用法人人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定により、2006年6月にイスラーム地域研究を総合的に推進するための共同研究拠点として創設された。小松久男教授と大稔哲也准教授を兼担教員とする。早稲田大学、上智大学、財団法人東洋文庫などに設置された研究拠点とともにイスラーム地域研究ネットワークを形成しつつ、2006-2010年度で「思想と政治の動態：比較と連関」をテーマとする研究を展開する。内外の研究者（センター流動教員として他部局・他大学教授3名、センター客員教員として外国人研究者1名）を受け入れ、共同研究を行うとともに、日本学術振興会特別研究員などの若手研究者を本センター研究員として受け入れる。活動の詳細については、次のURLを参照されたい。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/>

＜データベース拠点・大蔵経＞は、科学研究費補助金と民間の支援を合わせ6億円の資金と226人の協力者、13年の歳月を費やして完成した大蔵経テキストデータベースを基礎とし、次世代人文学の重要なテーマである人文情報学・文献資料分野の研究モデルを構築すべく、2007（平成19）年4月に設立された。現在は、英語電子仏教辞典（世界70人を超える研究者が寄稿する世界的な仏教語彙集）、インド学仏教学論文データベース（日本印度学仏教学会が運営する過去100年の論文データベース）、ロンドン・パリ聖典協会公認テキストデータベース（バンコク・タンマガーイ財団運営）、ハンブルク大学インドチベット学レキシコンプロジェクト、英訳大蔵経プロジェクト（財団法人仏教伝道協会運営）等の大型仏教研究プ

プロジェクトと本格的な共同研究を進めるとともに、日本の知識基盤を形成する国家事業である国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) とも連携をし、世界の仏教知識基盤の拠点として、かつ文字資料にもとづく人文情報学の先進的拠点として本格的な活動を進めている。特任のチャールズ・ミュラー教授、兼任の下田正弘教授と研究員によって推進されている。

## 2. 構成員・専門分野

### (1) 部門別構成員

- 先端構想部門
  - 小佐野重利教授、松山聡助教 (文化交流)
  - 小島毅准教授 (東アジア海域交流)
  - 佐藤慎一特任教授
- 創成部門
  - 島菌進教授 (死生学)
  - 清水哲郎教授、山崎浩司講師 (上廣死生学寄付講座)
- 萌芽部門
  - 古井戸秀夫教授 (演劇学)
  - 下田正弘教授
  - 松村一登教授
  - Albert Charles Muller 特任教授
  - 小松久男教授、大稔哲也准教授 (イスラーム地域研究)

### (2) 助教の活動

松山 聡 (1995年4月1日～現在)

研究領域 先史考古学

主要業績

(発掘調査)

2008-2009年 イタリア共和国カンパーニア州ソンマ・ヴェスヴィアーナ所在のローマ時代別荘遺跡の発掘調査参加

(論文・報告等)

Masanori Aoyagi, Claudia Angelelli, Satoshi Matsuyama: “Nuovi scavi nella “Villa di Augusto” a Somma Vesuviana (NA): campagne 2002-2004”, Estratto dai RENDICONTI della Pontificia Accademia Romana di Archeologia, volume LXXVIII 2005-06, 2007, pp.75 - 109

Claudia ANGELELLI, Satoshi MATSUYAMA, Katsuhiko IWAKI “Somma Vesuviana, 'Villa di Augusto'. Nuovi dati dalla campagna di scavo 2008”, 国際シンポジウム・火山噴火罹災地の文化・自然環境復元, 2009年2月, 発表要旨, p. 4

松山 聡、青柳正規、松田 陽, 「イタリア南部ヴェスヴィオ山北麓に位置するローマ時代遺跡発掘調査について」, 『文化交流研究』第22号 (2009), pp.65-79

Claudia ANGELELLI, Satoshi MATSUYAMA, Katsuhiko IWAKI “Somma Vesuviana, 'Villa di Augusto'. Nuovi dati dalla campagna di scavo 2009”, 国際シンポジウム・火山噴火罹災地の文化・自然環境復元, 2010年2月, 発表要旨, p. 4

松山 聡、青柳正規「イタリア南部ヴェスヴィオ山北麓に位置するローマ時代遺跡の発掘調査について (2009)」, 『文化交流研究』第23号 (2010), pp.67-76

### (3) 2008～2009年度の外国人教師の活動

該当なし

### (4) 2008～2009年度に受け入れた内地研究員・外国人研究員

2008～2009年度 研究員 古橋紀宏 (先端構想部門・東アジア海域交流)  
佐藤知乃 (創成部門・死生学)



## 3 1 北海文化研究常呂実習施設

### 1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約 2 万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連綿と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワやナラの林の中に 2,500 を超える竪穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は 1955 年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957 年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967 年からは助手 1 名が文学部考古学研究室から派遣され、1973 年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、准教授・助教各 1 名、有期雇用職員（管理人等）2 名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004 年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は 11 冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、2008 年度～2009 年度にかけてもロシア連邦のアムール下流域において、現地の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら発掘調査を実施した。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した 7 冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元竪穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。また、新たに史跡公園化が予定されている別の遺跡（「トコロチャシ跡遺跡群」）では、2003 年度より現在まで北見市教育委員会と協同して史跡整備のための発掘調査を実施している。さらに 2000 年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2009 年度までに 13 回を数えている。

### 2. 構成員・専門分野

#### (1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

## (2) 助教などの活動

助教

高橋 健 TAKAHASHI, Ken

在職期間 2007年4月～2009年3月

研究領域 北東アジア考古学

主要業績 「知床半島の骨角器」『知床の考古』北海道斜里町・斜里町教育委員会 (2008)  
「最寄貝塚出土の骨角器について」『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会 (2009)

## 3 2 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、平成7年4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成5年度より部分的に試行されてはきたが、平成7年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートすることになったのである。

発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられた。そして、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3～4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められてきた。なお2000年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

このプロジェクトは、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしなが、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

平成11年度からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた〈情報と文化：文化資源と人文社会学〉は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかに、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成14年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。

多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、ニューズレターが発行されている。刊行ペースは現在年3回、2009年度までで63号を数える。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

2008年度・2009年度に開講されたプロジェクトは以下の通り。

### 2008年度

「生命と価値」論のフロンティア（主査 竹内整一・島蘭進）

言葉の力—言葉の働く場所（主査 松永澄夫）

グローバル・ヒストリーと歴史教育（主査 水島司）

今日の世界文学（主査 柴田元幸）

2009年度

「生命と価値」論のフロンティア（主査 竹内整一・島藺進）

言葉の力（2）一言葉は社会を動かすか（主査 松永澄夫）

東アジアの王権と宗教（主査 小島毅）

今日の世界の文学・文化（主査 柴田元幸）

多分野交流プロジェクト研究の直接の成果として出版された論文集には、主に以下のものがある。

関根清三編『死生観と生命倫理』東京大学出版会、1999年

沼野充義編『とどまる力と越え行く流れ—文化の境界と交通』2000年

小島 毅編『東洋的人文学と架橋する』2001年

逸身喜一郎編『古代ギリシャ・ローマ研究の方法』2003年

柴田元幸編『文字の都市』東京大学出版会、2007年

松永澄夫編『言葉は社会を動かすか』東信堂、2009年

